

**Standards for Foreign Language Learning  
in the 21st Century  
21世紀の外国語学習スタンダードズ**

**「外国語学習スタンダードズ」**

**National Standards in Foreign Language  
Education Project  
外国語学習ナショナル・スタンダードズ  
プロジェクト**

**日本語版発行：国際交流基金日本語国際センター  
翻訳者：聖田京子**

Material from “Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century” is reproduced by permission of American Council on the Teaching of Foreign Languages, Inc. on behalf of the National Standards in Foreign Language Education Project, 6 Executive Plaza, Yonkers, NY 10701-6801  
© 1999 National Standards in Foreign Language Education Project.

## はじめに

いま海外の日本語教育は、初中等教育において拡大しつつあります。高等教育とは異なり、年少者に対する日本語および日本に関する基礎教育を担う初中等教育においては、とりわけ、統一性や一貫性のあるシラバスやガイドラインの整備が重要となるのです。すでに本格化している国々においても、さらに充実を図るために、常にシラバスやガイドラインの最新化が行われています。その動向や成果は、これから本格的に取り組もうとする国々にとっては、きわめて重要な参考資料となるのです。国際交流基金のみならず、海外の日本語教育に携る関係者にとっても、それぞれの国や地域での教育指針を知り、的確に対応するうえで貴重な情報となっています。日本語国際センターでは、それら原本を附属図書館に収蔵して関係者に提供してまいりましたが、和訳がなかったため、原語を解する方々のみの利用に限られていました。また、ホームページ上の「国別情報」でも詳細に紹介することができなかつたのです。

その不都合を解消することによって関係者間の相互交流を図り、より一層日本語教育を拡充するための一助として、このたび7カ国（韓国、中国、インドネシア、ニュージーランド、米国\*、英国、ドイツ）から9点のシラバス・ガイドラインを選び翻訳刊行（分冊）することといたしました。同時にホームページ上でも公開いたしますので、皆様はお手元で世界の日本語教育のさまざまな取組みの背景や展開を見ることができるようになります。ひとくちに日本語教育といいますが、実に多様な目的や目標、方法や手段、そして課題があることがお分かりいただけるものと思います。むろん、今回の対象がすべてではなく、引き続き多様な取組みをご紹介してまいりたいと計画しております。

今回の翻訳刊行は、それぞれの原著作者・機関（別記）のご理解とご協力なしには実現いたしませんでした。日本語教育に携る者同士の共感が実を結んだものと思います。ここに、謹んで謝意を表します。

2002年（平成14年）3月

国際交流基金日本語国際センター  
所長 加藤 秀俊

\*米国分は、ホームページ上での公開のみ。

## 日本語翻訳版の刊行にあたって

外国語学習スタンダードはアメリカの 21 世紀における外国語教育の方向を示すべく開発された教育内容の枠組みです。教育の目標領域は 5 つの C (Communication: その言語でコミュニケーションを行う、Cultures: 他の文化への知識と理解を深める、Connections: 言語を通して他の分野とつながりを持ち、情報を得る、Comparisons: 比較を通して言語・文化への洞察力を養う、Communities: 言語習得の継続と多言語社会への参加) から構成されています。これらの目標領域を支えるのに全部で 11 項目にわたる指導基準 (standards) があり、学習ストラテジーやテクノロジー分野の研究成果も組み入れられています。また、従来の外国語教育に比べ、幅広い視点・観点から教育内容が捉えられていることが特徴です。

幼稚園から高校までの全生徒を対象に、外国語の必修科目参入への理想を掲げて開発されたスタンダードの背後にある教育理念は、「言葉とコミュニケーションは人間生活の基本であり、多民族国家であるアメリカは、国の内外において子ども達が多文化・多言語の社会環境に適応し、貢献できるよう教育しなければならない。子ども達は英語の能力を高めると共に、1 つ以上の外国語を習得する必要がある。英語を第二言語とする子ども達は第一言語である母語も伸ばさなければならない。」とうたい、世界のグローバル化に伴い、交流する人々の外国語使用の広がりを「世界の言語」と称し、それを学ぶ重要性を訴えています。

アメリカでは 21 世紀を迎える教育上の準備として、連邦政府が全教科を対象にナショナルスタンダードの開発を奨励しました。外国語分野では 1993 年に全米外国語教師協会 (ACTFL) と他の 4 つのヨーロッパ系外国語教師会が合同で連邦政府教育省の支援を受け、ナショナルスタンダード実行委員会を発足させました。3 年間の努力の後、1996 年に『外国語学習スタンダード: 21 世紀への準備』を発行しました。その 2 年後に日本語や中国語を含む 7 つの外国語教師会が ACTFL に加わって、言語別スタンダードを含む『外国語学習スタンダード』が 1999 年に発行されました。

本書は、この『外国語学習スタンダード』の中から、全外国語に共通する部分<sup>1</sup> (generic) である「外国語学習スタンダード」と日本語に向けた「日本語学習スタンダード」の全部を翻訳したものです。日本語スタンダードは北米日本語学会 (ATJ) と全米日本語教師会 (NCJLT) の代表が共同で作成に当たりました。外国語スタンダードの教育理念と 5 つの C 及び 11 項目のスタンダードの枠組みに沿い、日本語独自の特徴やニーズに適合すべく修正を施し、アメリカにおける日本語教育に適切な方向づけとなるように作成されました。

日本語スタンダードの 1 つの特徴は、外国語スタンダードが幼稚園から高校までを対象にしたのに比べ、K - 16、すなわち、幼稚園から大学までを対象に開発されたことです。そこには、各レベル (幼稚園・小・中・高・大) 間の強い協力関係が見られると同時に、教育内容の枠組みの共通性から、レベル間の引き継ぎの問題が幾分緩和される可能性が見られます。

---

<sup>1</sup> “Standards for Foreign Language Learning in the 21<sup>st</sup> Century” p3-38, p39-41, p48-49, p53-54, p57-58, p63-64, p97-100

<sup>2</sup> 同 p325-360

アメリカでは州レベルでその地域の教育政策を決定するという地方分権制が施行されており、全国的規模で枠組みが完成したのはこのスタンダードがはじめてです。従って、それがそのまま 50 州の教育現場に採用される保証はありません。しかしながら、スタンダードは教育政策の担当者や親に外国語学習の重要性をアピールするのに効果的なガイドラインです。教師は州の教育局による採用を通して、あるいは外国語教師会などの活動や各種教育機関の支援・協力を通して、スタンダードを適切に実践していくことができ、学校現場における効果は発揮されつつあります。州によっては既に採用が決定され、教材をはじめ、大学における教師養成プログラムの内容としても取り入れられてきています。

ハワイ大学 東アジア言語・文学科教授

聖田京子

# 目 次

謝辞	1
教育理念	2
外国語学習スタンダードズ	4
はじめに	5
外国語と教養ある国民	5
スタンダードズの開発	6
スタンダードズの意義	9
アメリカにおける言語教育	11
現在の状況	11
幼稚園（K）から大学（16）までのモデル・プログラム	14
多言語学習の開始時期と継続性	17
教育方法について	18
言語学習の特徴	19
外国語学習スタンダードズについて	21
「外国語」という用語の使用	21
構成と定義	21
外国語学習スタンダードズの活用法	22
構成上の基本原理（Organizing Principle）	25
外国語教育の目標領域（5つのC）	25
カリキュラム要素の組み入れ	26
コミュニケーション形態（Communication Modes）の枠組み	30

コミュニケーション ( Communication ):	
英語以外の言語でコミュニケーションを行う .....	34
文化 ( Culture ):	
他の国の文化に関する知識と理解を深める .....	37
コネクション ( Connections : つながり ):	
他の教科内容に関連づけ、情報を得る .....	40
比較 ( Comparisons ):	
学習言語と自国語の比較により、言語と文化へ洞察力を養う .....	42
コミュニティー ( Communities : 地域社会 ):	
国内及び国外において、多文化・多言語社会に参加する .....	44
よく質問される事項 .....	46

## 謝 辞

外国語学習スタンダード作成に当たり、知的にも財政的にも多大なご支援を頂きました次の団体や個人に感謝いたします。

- \* U.S. Department of Education (アメリカ連邦政府教育省) と National Endowment for the Humanities (人文科学基金) に対して。  
(資金援助により世界の言語を学習するためのスタンダード開発を行う機会を与えて下さり、また、それによってアメリカの若者が多言語社会で活躍できるようにして下さいました。)
- \* 絶えざるご指導・ご支援をいただきました上記両機関のプログラム担当者の方々。
- \* 強力な団結力を発揮して下さい下さった協賛下の組織団体役員の方々。
- \* 学習者にとって素晴らしい教育目標であるとして、スタンダードへの支持を表明して下さい下さり、企業や政府、教育、地域社会の団体など多くの分野でリーダーシップを発揮し活躍されている評議員の方々。
- \* スタンダードの作成や改訂、訂正、評価検討などに、はかり知れないほど多くの時間を割いて下さったコンサルタントの方々、プロジェクト・チーム、及び実行委員の方々。
- \* スタンダードが新世紀に備えての重要かつ有効な教育基準になると、支持を与えて下さり、会議においては資料や情報の提供、及び確認などをして下さった各州の教育関係代表者の方々。
- \* クラス実践を通してスタンダードが素晴らしい均衡のとれた学習内容になるよう、向上に助力して下さい下さった実験参加校の先生方。
- \* 外国語教育及び専門家の全面的な承認を得るべく、スタンダードの原稿を精読し、調査し、そして良心的なフィードバックをして下さった大勢の評価委員会 (Board of Reviewers) のの方々。

June K. Phillips, Project Director

(ジューン K. フィリップス、プロジェクト責任者)

Christine Brown, Task Force Chair

(クリスティーン ブラウン、タスクフォース委員長)



## 教育理念

下記の教育理念は、外国語学習におけるナショナル・スタンダード開発をはじめに際して、K-12 [キンダーガートン（幼稚園）より12（高校3）年生]の実行委員会によって作成されたものである。この教育理念に基づいて、外国語教育の目標が生まれ、指導内容に関する枠組み設定が行われた。

言葉とコミュニケーションは人間生活の基本であり、多民族国家であるアメリカは、国の内外において子ども達が多文化・多言語の社会環境に適応し、貢献できるよう教育しなければならない。子ども達は英語の能力を高めると共に、1つ以上の現代語または古典の外国語を習得する必要がある。英語を第二言語とする子ども達は第一言語である母語も伸ばさなければならない。

この観点を支えているのは、「言語と文化」、「言語と文化の学習者」、及び「言語と文化教育」の3つそれぞれの関係性に関する理論や仮説である。

**「言語と文化」：1つ以上の言語と文化を身につければ以下のことが可能である**

- \* 他文化の人々と種々の分野でコミュニケーションができる。
- \* 自己の日常のものの見方を越えた事物に目を向ける。
- \* 自己の言語と文化について意識的に洞察力を培う。
- \* 自己及び他の文化、その人々との関係について強い意識をもって行動する。
- \* 広い領域の知識を学習言語で入手できる。
- \* グローバルな社会や市場に、より積極的に参加できる。

**「言語と文化の学習者」：すべての学習者が言語と文化の良き習得者になれる。従って、学習者は、**

- \* 学校のすべての学習過程で言語と文化に接する機会がなければならない。
- \* 1つ以上の言語を習得及び維持することにより恩恵が受けられる。
- \* 色々な状況設定の下で、効果的な方法を用いて学ぶ。
- \* 異なる速度で、異なるレベルの言語能力を習得する。

**「言語と文化教育」: 言語と文化の教育はコアカリキュラム (core curriculum: 必修科目のカリキュラム) の一部となるべきである。従ってそれは、**

- \* 効果的学習戦略、評価法、及びテクノロジーを備えたプログラムモデルに直結するものであり、
- \* 国、州、地域レベルのスタンダードの作成に反映され、
- \* コミュニケーション・スキルを高め、高度な思考能力を伸ばす。

# 外国語学習スタンダード

## コミュニケーション (Communication)

### 英語以外の言語でコミュニケーションを行う

- スタンダード 1.1: 対話を通して他の人と情報のやりとり、感情の表出、意見の交換をする。
- スタンダード 1.2: 様々な話題について、書かれたものや話し言葉を理解し、解釈する。
- スタンダード 1.3: 様々な話題について、自分の考え、意見及び情報などを口頭で、あるいは、書いて発表する。

## 文化 (Cultures)

### 他の国の文化に関する知識と理解を深める

- スタンダード 2.1: 他の国の人々の習慣・慣習 (practices) を学び、その背景 (perspectives) について理解する。
- スタンダード 2.2: 文化的所産・産物 (products) とその背景 (perspectives) について理解する。

## コネクション (Connections : つながり)

### 他の教科内容に関連づけ、情報を得る

- スタンダード 3.1: 外国語を用いて他の教科分野の知識を習得・補強する。
- スタンダード 3.2: 学習言語及び文化を通して情報を得、特有な視点を認識する。

## 比較 (Comparisons)

### 学習言語と自国語の比較により言語と文化への洞察力を養う

- スタンダード 4.1: 自他の言語を比較し、言語に関する理解を深める。
- スタンダード 4.2: 自他の文化を比較し、文化の概念を把握する。

## コミュニティ (Communities : 地域社会)

### 国内及び国外において多文化・多言語社会に参加する

- スタンダード 5.1: 学んだ外国語を学校内外で使用する。
- スタンダード 5.2: 人生を豊かにするために外国語を使用し、生涯教育の一環として学習の継続を心がける。

## はじめに

現在、一口にアメリカ人と言っても、ビジネスマン、詩人、救急室看護婦、外交官、科学者、十代のコンピュータ少年など、そこには多様な役割をこなす様々な人々の姿がある。これらの人々に外国語を学ぶ意義を尋ねると、それぞれに納得のいく理由を挙げるだろう。その中には、現実的な理由をあげる者もあれば、理想にすぎないことを言う者もいるだろう。しかし、真に他者を理解するには、コミュニケーションができなくてはいけないという点においては共通している。

伝統的なアメリカ文化といえば、田舎で見られるような広々とした緑の芝生とブランコのあるポーチ、あるいは、都市の家の玄関先の石段で、気軽に立ち寄った友人と時を過ごすような開放的な姿であった。しかし、今日、ひょっと立ち寄って何かを尋ねたり、頼みごとをしたり、また、ディスカッションをしたり、珍しい手土産を持って訪ねて来るのは近所の人だけではなく、世界中からの人々である。今や道は自分の周りだけでなく、それを超えて世界へと進みつつあり、ちょっと用事を足すのでも広い世界へと生活の枠を広げようとしている。玄関先の世間話で使っていた言葉は、もはや外国とのビジネスや新しい友人をつくるのには十分ではない。全世界の人々を理解し、自分を相手に理解してもらおう能力を身につけなくてはならないのである。

他の言語や文化を学習することは、効果的にコミュニケーションすることを意味し、誰に、何を、いつ、どのように、なぜ伝えるかを知る上で重要な鍵となる。人間対人間のやり取りを効果的にするため必要とされる言語的、社会的知識は、そのコミュニケーションの大切な要素に集約されている。一昔前まで、外国語教室の授業は文法と語彙の指導に限られていた。それらが言語の中で重要な位置を占めることにはかわりはないが、今の言語学習の流れとしては、コミュニケーションが主要な位置にあり、(言語の社会的、文化的側面である)コミュニケーションの「誰が誰に、いつ、なぜ」が強調されている。今日、教室で見受けられる第二言語教育へのアプローチは、別の大陸や街の向こう、あるいは近所に住む人々との交流を促進することに主眼を置いている。

### 外国語と教養ある国民

異なる言語と文化を学ぶことは、様々な意味で教養を深めることである。たとえば、新しい言語を学ぶことによって、自己の母語を客観的に見ることができるようになる。それは第二言語の学習経験がない者にとっては理解しにくいことであるが、外国語を学んだことのある者には自明のことである。自己の言語の仕組みやその言語で表現できる限界、また、言語と文化の相互依存性はすべて、第二言語の学習を通してのみ理解できる概念である。他の言語を学ぶうちに、学習者は学習言語の母語話者がコミュニケーションの際に、どのような方法で巧みに言葉を使い分けるかを理解できるようになる。さらに、話す際の声の音量や高低、速度が、微妙な感情表現のためにいかに重要であるか、また、メッセージを伝達する際に、視線を合わせることや顔の表情、身振りなどにも特別な意味が込められていることを認識できるようになる。そのようなことが理解できるようになると、学習者には、母語に対するのと同様に、他の言語に対してもその言語のもつ美しさ、すばらしさへの尊敬の念も生まれる。

これまでの研究の中には、学習者が他の言語を学習することにより、他の教科においてもより高いレベルの能力を発揮する可能性を示すものがある。ノースイーストミズーリ大学の1981年から1986年の間に入学申請をした17,000人以上の学生を調査したところ、高校で外国語を履修した学生は、大学入学到達度検査（ACT）の英語と数学において、各学生の能力にかかわらず、比較的高い点を取る傾向にあることが明らかになった（Olsen and Brown 1992）。この研究結果と同調する研究が他にもある。それによると、高校で外国語を履修した学生と、履修しなかった学生の学習適性検査（SAT）の言語的能力試験を比較した場合、外国語履修者の得点が履修しなかった学生よりも高かったこと、また、外国語を半年学習するごとに同試験の得点が高くなることも突き止めた。さらに、同研究では、学習者の家庭の経済的な要因は試験結果に関係ないことを示した。つまり、より低い社会経済層出身者でも外国語を履修した学生は、比較的裕福な層出身の学生と同等レベルの試験結果であったということである（Cooper 1987）。

他の言語及び文化を学ぶことのメリットは、それだけではない。文学でいえば、皮肉、ユーモア、風刺などを盛り込んだ文章の真髄は、その言語と文化に通じる者にしか理解できない。同様に、劇や詩の微妙な趣向はそれを創作した者や書いた者の言語を知っている者にしか分からない。こうした母語話者のために書かれた文学作品に接することは、他の言語や文化を学習することによって可能となる。

他の言語及び文化を学ぶことは、周りの物事を関連づけて考える能力を養うことでもある。外国語の授業においては、歴史や地理、社会、科学、数学、芸術等を取り扱うため、学習者が異文化を理解すると同時に、教科間の壁を越えて、物事を総合的な観点で見える力も容易に養える。実際には、外国語を指導する際の様々な方法でその力を伸ばすことができる。つまり、物事を明示するために実生活で使われるものの写真や絵、物などを用いたり、様々なゲームなどで身体を動かしたり、ロールプレイや寸劇をしたりすることである。また、音楽を聴いたり、奏でたり、歌を歌ったり、物事の流れを考えたり、記憶したりすることや、帰納的、演繹的論理法に限らず、問題解決することでも養うことができる。このような広範囲に及ぶ言語学習ストラテジーは、学習者一人ひとりの多様な学習スタイルを認めることであり、それにより学習者は自己の知的能力を多方面から見直すことができるようになる。

また、他の言語及び文化を学ぶことにより、学習者は将来に向けて備えることができる。21世紀において、相手のことを配慮しながら、効率よくコミュニケーションできる能力が、いかなる仕事や娯楽活動においても役に立たないということは想像できない。将来、どの外国語が有用となるかを見通すことは不可能であるが、第二言語習得過程を一度経験した者は言語学習能力を身につけているため、別の言語も比較的容易に学習することができる。世界中の人々との交流が身近になった今日では、外国語学習で養われる言語的、文化的洞察力が、日々の生活で求められている。

## スタンダードの開発

アメリカでは、幼稚園から高校3年生（K-12）までの生徒用のナショナル・スタンダードの開発が行われる中で、外国語教育が全教科の中で最後に連邦援助金を受け取ったのは1993年のことであった。11人からなる実行委員会は、様々な言語や指導する学校レベル、プログラム、地域から選ばれ、

スタンダードの内容、すなわち、学習者が4年生、8年生（中学2年生）、12年生（高校3年生）の段階において、外国語教育の中で何を理解し、何ができるか、という指導内容スタンダードを設定していくという重大な仕事を任せられた。

## 開発過程

実行委員会のメンバーは、スタンダードの開発に際し、まず外国語教育を通して学習者の何ができるように指導すべきかを調査することから始め、外国語としての目標を広範囲に定めた。次に、学習者が12年生修了時に求められる言語能力や知識を目標の分野ごとに設定した。ここでいうスタンダードを構成するのは、そのような基本的な言語スキルにおける能力、知識である。

スタンダード開発の段階ごとに、実行委員会はより広範な職業の従事者と作業を共にし、草案には多くの人々が目を通した。実行委員会のメンバーは何百という数の発表をし、また、草案を書き直す度に寄せられるコメントを読んだ。寄せられたコメントはすべて熟慮されたため、このスタンダードの内容は、多くの助言により改訂されたことを反映している。

1996年の『外国語学習のスタンダード：21世紀への準備』の発行に続き、スタンダード・プロジェクトのスポンサーとなった次の4団体、米国外国語教育協会（American Council on the Teaching of Foreign Languages: ACTFL）、米国フランス語教師会（American Association of Teachers of French）、米国ドイツ語教師会（American Association of Teachers of German）、米国スペイン語ポルトガル語教師会（American Association of Teachers of Spanish and Portuguese）の共同作業は新たに次の7団体、米国イタリア語教師会（American Association of Teachers of Italian）、米国古典協会（American Classical League）、米国ロシア語教師会（American Council of Teachers of Russian）、中等初等学校中国語協会（Chinese Language Association of Secondary-Elementary Schools）、中国語教師会（Chinese Language Teachers Association）、全米日本語教師会（National Council of Secondary Teachers of Japanese）、北米日本語学会（Association of Teachers of Japanese: ATJ）を迎えた。これらの団体は、基本の（generic）スタンダードを取り入れ、それをさらに発展させ、それぞれの言語独自のスタンダードを作成することとなった。この1999年版のスタンダードドキュメントはこれらの団体による言語別スタンダードを含んでいる。

## ACTFL 言語能力ガイドラインとの関連

1986年、ACTFLはACTFL言語能力ガイドラインを発表した。連邦政府のために開発された測定基準に基づき、そのガイドラインは第二言語のリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの実践力（performance）を測定する内容となっている。その言語能力に関するガイドラインは、外国語教育に携わる者が実際の言語使用の測定に関する論議を始める際に、共通のものさしとして使われるようになった。本書の内容スタンダードには、指導内容スタンダードが収められているが、その作成にあたり、ACTFLのガイドラインでの実践力の測定に関する議論が参考になったことは言うまでもない。両者を比較すると、このスタンダードでは指導内容の基準を取り入れているため、言語をスキル別に取り扱ったACTFL言語能力ガイドラインより明らかに包括的な内容となっている。

このスタンダードを読まれる学校の先生方は、本スタンダードの、特にコミュニケーションの分野

に ACTFL ガイドラインの影響を認めることと思われる。しかしながら、本スタンダードでは、コミュニケーションを広範囲で捉え、リスニングやスピーキング、リーディング、ライティングのように言語スキルを個別に扱わずに、コミュニケーションにおける相手とのやり取り ( interpersonal )、聞いたり、読んだりした言語を解釈すること ( interpretive )、また、自分の意見を発表すること ( presentational ) を中心としてまとめられている ( p.33 ~ 36 参照 )。1998 年、ACTFL は言語能力測定基準とコミュニケーションの持つ形態を組み合わせ、「年少学習者のための能力ガイドライン ( Proficiency Guidelines for Younger Learners ) 」を作成、発行した。ここで重要なことは、この内容スタンダードはこれまで「おもしろい授業」をするための二次的に使うもの、またはおまけとして考えられていた外国語指導の重要な要素を前面に押し出したことである。将来の学習者に永く影響を与えるのは、こういう内容重視の姿勢、つまり、言語スキル中心ではなく、探求心や人間活動の様々な分野における情報を得ようとするなどである。

### 言語使用能力の実践力基準設定

学習者の実践力基準を設定するのはそれぞれの州、学校区に任せられている。外国の学校で設けられている基準まで米国の水準を引き上げようという取組みの中で、このスタンダードに関する文書が作成された。結果として、学校側は、昔の修了基準の最低ライン能力よりかなり高い実践力を修了基準に設定することを奨励された。今まで行われてきた高校での二年間の外国語の授業では、第二言語を学習しても習った表現しか使えず、口頭ではほとんどやり取りができないという学生を生み出した。つまり、教室では、状況に応じてフレーズを練習させるという指導で、学習者は教えられた通りに応じられるかに見えた。しかし、学習言語の母語話者に話し掛けられたりするような状況になると、自分の話す言葉のレベルでは不十分と分かり、英語を話してしまうことがよくあった。

ここに書かれているスタンダードに基づいた外国語プログラムではどのレベルにおいても、学習者に現在何が理解でき、またこれから理解できるようになるかを評価することが鍵となっている。学習者及び教師は、学習者の学習状況を明確に知っておくために、学習者がどのように言語に触れ、またどのように進歩しているかを絶えず見守っていなくてはならない。学習者はあるひとつの技能や状況において、実践力の高原状態 ( plateaus ) を示すことがよくあり、文化的により難度の高いコミュニケーション・タスクに再挑戦するようになるまでに、十分な練習期間が必要である。このようなプログラム運営上のポイントは、言語教育上の目標と共に考慮されなくてはならない。

言語学習において、学習者すべてが同じ道をたどるということはない。むしろ、学習者一人ひとりの学習状況や実践力のレベルには、学習者の第一言語、第二言語を問わず、年齢や動機、学習スタイル、好み、及び言語学習経験等の要因が多く関わっているため多様であるのが通常である。たとえば、初めて外国語を習っているジョセフは自分の言いたいことを会話では積極的に伝えようとするかも知れないが、教室内で読むもの以外はほとんど読まない学生であるということも考えられる。小学校でフランス語を習ったバレリーは、現在高校でイタリア語の授業を取り、機会あるごとにイタリア語の本を読もうとしている。最近、難しそうなものも読めるようになってきたが、直接相手と向き合っただけの会話となると、自分が上手く言えると分かっていることしか話そうとしない。祖父母がスペイン語で話し掛けるティナの場合、教室では他の学生よりスペイン語がうまいが、彼女は将来の仕

事に役立つよう、もっと広範囲の話題について議論したり、書いたりできるようになりたいと思っている。家庭と中学校で広東語を習ったジェフの場合は、現在は高校で北京語会話を集中的に学んでいる。このように、学習者はそれぞれ異なる状況で、異なる言語スキルを学び、また、異なる学習段階にある。そこで、多くの学生により高い第二言語能力を身につけさせて修了させるように、学習者の能力を把握し、学習する実践力レベルを設定するのはプログラム運営上の責任である。

とりわけ、このスタンダードで想定されているような長期に及ぶ学習には、学校側がスタンダードの一般的な目標と共に、コミュニケーションができるようになるまでの予想時間を示した修了基準を設けることが重要である。意欲にあふれ、学習の機会が与えられた学習者はすべて、自己の学習言語で創造し、その言語を用いて、予想されるいかなる状況においても効果的にコミュニケーションができ、様々なトピックにおいて相手と柔軟に言葉の意味を確かめ合い、年齢や興味に応じて書物を選び、多少なりとも理解し、文化的に適切に振る舞うことができるレベルに達することができるようにならなくてはならない。学習者の中には、種々の状況に合わせて言葉を選択し、巧みに操れるようなレベルに達する者もいるだろう。そこで、このスタンダードでは、まず、アメリカの教育現場で、学生がどのレベルの能力まで到達できるかを測定するための実践力スタンダード作成上の基本原理を議論している。

## スタンダードの意義

スタンダードの開発は外国語教育の分野に大変な活気を与えることとなった。それまでは、幼稚園から大学までのすべてのレベルの教育者が、1つのスタンダード開発に参加し、同意に至るまで議論した例はなかった。ある点では、外国語教育は他の教科よりもスタンダード開発を引き受ける準備が整っていたと言える。言語教育者は、学習者が実際に意義のある方法で言語を使用できるようにと、十年以上に渡って能力別指導法や評価を議論してきたのである。また、すべての学生が言語教育を受けべきだという理論的根拠に関し、だれもが納得するようにと大掛かりな議論もなされてきた。

それは同時に、直ちに役に立つことを強調したため、幅広い経験や知識を身につけさせることのない、偏った内容のカリキュラムになることがよくあった。そこで、スタンダードの準備は、第二言語研究及びその能力についてのより大きな見方、つまり、学習者が現在何を理解し、将来何が理解できるようになるか、また、どれほどの理解が可能か、などに注意を向けることになった。明らかに、この外国語のスタンダードは我々が今まで何十年も求め、しかし、言葉や概念で捕らえることができなかった外国語教育の必要性に対する、より幅広い、より完全なる論理的根拠を提示している。

1996年に『ナショナル・スタンダード』が出版された時、その反応はそれぞれの州や地域で見られた。ナショナル・スタンダードにならって、半数を超える州で新しくスタンダードが作成され、結果として、多くの地域でそれに合わせるようにカリキュラムが再編成された。州の中には、選び抜いたスタンダードに基づいて評価を開始したところもあり、小学校でのプログラムの発展は、スタンダードで唱えられた早期学習開始によるものと考えられる。

ナショナル・スタンダードによって、学生一人ひとりの学業における外国語の中心的役割が定義づけられるという新しい状況が生まれた。これをきっかけとして、我々が将来に向けて足場を整備する



ことによって、このような変化は加速的に進むであろう。つまり、学校内では、経験の少ない語学教師も全員、スタンダードに備えなくてはならないということである。教育実習生の研修も重要であり、スタンダードが伝達すべき内容が、実習体験に十分反映されていなくてはならない。

このように、スタンダードの問題は今後十年間で解決できるものではなく、その後も課題となると思われる。

## アメリカにおける言語教育

外国語プログラムは全米の学校のあらゆる学年で盛んである。しかし、これはどこでも同じ条件で起こることではなく、学習者がそれぞれ第二言語能力を十分発達させられるかどうかは、時間や場所によるところが大きい。各州がより厳しいスタンダードを採用する方向で進むにつれて、より多くの学生がより多くの言語で、これまでよりも長期に渡る指導から恩恵が受けられるよう外国語プログラムが拡大される傾向にある。

### 現在の状況

現在のアメリカの外国語カリキュラムはパッチワークのようで、形もサイズも多様である。最もよく見られるパターンは、学校が9年生で外国語学習を導入するもので、大半の生徒たちは二年間継続して履修する。そのパターンも、大学入学や優秀卒業証書授与のために州が条件を厳しくしたために、多くの場所で様変わりをした。学生自身が別の言語を学習することの価値を認め、必修レベル以上の力を目指すようになることは必至である。高校では、履修は選択で、上級レベルのクラスに直接入る学習者が増加している。しかし、上級クラスの学習者は多くなったが、高校で第二言語を始めても効果的なコミュニケーションを学習するには時間が不足している。逆に、早い時期に習い始めた学生は明らかに有利であるため、中学校で外国語教育を行う傾向は以前よりも高くなっている。年少の子どもは、毎日短時間学習するプログラムやカリキュラムの多くを第二言語で行うイマージョンプログラムで、集中的に外国語教育を受けている。そのような多様性を考えると、習熟度に大幅な差異が見られるのも当然と言える。

### 多くの言語

今日、アメリカの学生が学校で学んでいる言語を列挙すると、一般の人々はその多さに驚くかも知れない。伝統的、歴史的に見ても、また、資格を持った教師の数からも、最も学習者が多いのはフランス語、ドイツ語、ラテン語、スペイン語である。しかし、多くの地域で、民族的、地域的背景への結びつきや早期に将来を見据えること、個人的好奇心、チャレンジ精神を掻き立てられる等を理由に、アラビア語や中国語、ヘブライ語、イタリア語、日本語、ポルトガル語、ロシア語等を選択する学生もいる。

### 古典

古典の学習については、21世紀の始まりに近づいている今でも、全米各地の中学校、高校の外国語プログラムの中で脈々と続いている。約8万6千人のラテン語学習者が1994年の全国ラテン語試験を受け、上級レベルに直接入るための試験の受験者も年々増加している。私立学校で一般に行われる古典ギリシャ語の履修者も、全米ギリシャ語試験の受験者数を見ると増えているのがわかる。古典の勉強は、オーラルコミュニケーションのための言語使用があまり強調されないということを除くと、

他の言語同様、学習者にとって有益である。これらの言語を学ぶことでもたらされる言語発達への洞察力、文学を通じての古代文明への関わり、異文化理解は、すべて学校教育のカリキュラムで言語教育が取り入れられる一番の理由である。

### 教えられることの少ない言語 (The Less Commonly Taught Languages)

「教えられることの少ない」言語とは矛盾した言い方だが、世界中で最も多く話される言語のうちいくつかを指してそう呼んでいる。その中には、中国語、アラビア語、ロシア語、日本語といったその言語を話す人口の多い言語が含まれている。それらの言語は、アメリカが経済的、政治的、また、文化的理解の向上という点で、ますます関係が重要視される国々で使用されている。英語を話す者にとっては、これらの言語のある面（例：文字）を見て難しく思うであろうが、コミュニケーションを目的として指導を受けるならば、比較的学習し易い。これらの言語に習熟するには、古典を除く他の言語より時間がかかるので、大学以前のレベルから開始する長期プログラムを奨励することが重要である。

教えられることの少ない言語の学習者は、言語的差異（例：ロシア語の格システム、日本語の文字、中国語の音声）に遭遇することにより、自己の言語及び言語一般の様々な面を敏感に意識するようになる。ロシア語や中国語のような言語をある程度使いこなせるようになるにつれ、言語習得過程を自分で管理するための、また、多くの言語での可能性を処理するためのストラテジーを身につけていく。端的に言うと、ロシア語学習により、数字にそれぞれ「アルファベット」があるか否かの疑問が湧いてくることや、動詞が過去形では別の形になることで、言語に無限の可能性を見出すようになることである。それらの疑問に答えを探することで、学習者は言語の一般的な構造と共に、無限だと思っていた可能性にも限界があることが分かるようになる。

### 多様な言語学習者

一時期、それ程昔の話ではないが、高校の第二言語学習者の大半は大学進学グループに入っていた。これらの学習者は、主に高等教育が入学条件としている理由で語学の授業を取っていた。一方、他の国々では、言語学習は全員が必要と考え、専門や一般教養を目指す学生から、すぐ就職する者、サービス業に従事する者、ただ旅行が目的で学習する者までいた。長年、アメリカ人は、自国が広大な上に、国の内外を問わず英語を話す人口の多さを理由に、他の言語を学習することは不必要と片づけて来た。が、別の言語でコミュニケーションができること、また、異文化理解の能力を認めるアメリカ国民の数が増加するにつれて、電信や市場競争、国際的な生活が拡大し、それまでの状況に変化が訪れた。

多くの学校関係者は、言語学習はコミュニケーションという実践的のものを超えたものであると理解している。子どもはすべて、自己の言語と異なる言語がどのように機能し、また、言語がどのように相互に影響し合い、異文化では考えたことをどのように表現するかを学習することにより思考力を養える。かつて、言語は特別の能力を持った学生しか学習できないとする間違った考え方が見受けられたが、今はどんな学生でも、質の高い指導を受ける機会が与えられさえすれば、教室で力を十分発揮し、言語が習得できると認められている。外国語教育を受ける小学校の子どもを観察してみると、

どの子どもが将来大学へ進学するかは見分けがつかない。第二言語で話を聞いたり、話したりするのを楽しみ、熱心で順調に言語を身につけている子どもの姿しか見えない。中学校では、現在の教育方針や年齢相応のアプローチに準じた多くのプログラムの中で、第二言語を学習させている。このように、言語教育を早期に開始することは、より多くの学習者のより効果的な学習を期する上で確かな方策だと言える。

全米中の多くの学校では、学校で教える言語を家庭でも使用している多くの学生がいるが（例：スペイン語、中国語）、これらの学生の言語能力を発展、維持させるため特別授業が創設されてきた。たとえば、テキサスのメキシコや中米出身者の一世、二世、三世が多く住む地域では、パイリンガルの学生用の授業と同様、外国語としてのスペイン語の授業を行っている。さらに、中国系などの多くのグループでは、継承言語の学習は土曜に開かれる地域の学校やプログラムに支えられている。多くの場合、これらのグループはそのような学習での履修単位が認められる可能性を探っている。

特に、いわゆる「外国語」を履修している学生は次の2つのカテゴリー、（1）家庭では英語のみ使用するグループ、または（2）家庭では英語以外の言語を使用するグループ、のいずれかに入る。後者のグループはさらに、外国語として一般的に学校で教える言語を話すグループ（例：スペイン語）、学校で教える機会が次第に増えている言語を話すグループ（例：中国語、日本語、ロシア語）、外国語として教える機会がまれである言語を話すグループ（例：タイ語、ベトナム語、ハンガリー語）に分けられる。

家庭で英語以外の言語を使用している場合は、学習する継承言語の能力やレベルに差異が存在する。家庭で使用する言語を学習言語とする学生の特徴が下記にまとめられているが、それに加え、これらの学習者の特徴に関して語学教育専門家が直面する、言語を発達させるために必要なことも記されている。

学習者によってそれぞれニーズは異なるが、共通して必要な言語教育は、（1）現在持っている言語での強みを維持し、（2）家庭環境では発達を期待できない分野を補足し、（3）リーディング、ライティングに言語を使用させる教育である。

図 1 家庭で英語以外を使用する学習者の特徴

学習者の特徴	英語習得上必要とすること	継承言語または家庭での使用言語習得上必要とすること
米国内において、英語のみで教育を受ける二世、三世のバイリンガル	年齢相応の英語能力の継続した発達	言語能力（例：スピーキング）の維持、引き出し及び／または習得  英語の読み書き能力を家庭での使用言語へ応用  口頭及び読み書き能力の年齢相応の継続した発達
主に米国で教育を受ける移民の一世	年齢相応の英語能力の継続した発達	第一言語での読み書き能力の発達  口頭形態における年齢相応の言語能力の継続した発達
最近の移民者	英語の読み書き及び会話習得	口頭及び読み書き能力の年齢相応の継続した発達

## 幼稚園（K）から大学（16）までのモデル・プログラム

### 幼稚園（K）から 8 年生（中学 2 年生）までの言語教育の機会

小学校のモデルは多様である。イマージョンプログラムが最も集中的で、国語（ランゲージアーツ）としての英語を除き、全カリキュラムの授業が学習言語で行われる。フルイマージョンプログラムでは、学生は一日の 60% から 100% の科目を学習言語を通じて勉強することで、その言語を習得する。イマージョンプログラムを部分的に採用する場合は、一日の使用言語を英語と学習言語で半々とする傾向にある。このモデルのもう 1 つの形のツウウェイ（両方向）イマージョンは、英語以外の言語の母語話者が入学し、学習言語の母語話者と英語を話す学習者が両方の言語を使用し、一緒に授業に参加するというモデルである。

FLES（小学校での外国語）プログラムは、他のイマージョンプログラムほど集中的ではない。このプログラムでは、決められた一定期間だけ学習言語を教えるが、教師はその言語に通じ、小学校の学年を指導できる資格がなくてはならない。今日の多くの FLES プログラムは、初等カリキュラムを強化する、総合的なテーマを持って（内容を強化した指導（content-enriched）とよく言われる）授業を計画することでイマージョンプログラムの要素を取り入れている。FLES プログラムは、4 年生、8 年生（中学 2 年生）時のスタンダーズの到達指標に例示されるレベル到達を目指すならば、授業日に十分な時間を組み入れなくてはならない。

一方、FLEX（外国語体験学習または外国語実験学習）プログラムも小学校や中学校に存在する。このプログラムは、学生が本格的に学習する言語を選択する以前にいくつかの言語を試しに学習させるものである。FLES 及び FLEX プログラムは、学習言語に通じた教師や語学専門家が指導できるかも知れないが、プログラムの中にはテクノロジーを用いたものがあり、現場の教師は言語に通じていないということもある。当然、それぞれの状況で到達可能なレベルには差異が生じると考えられる。

低学年では、多くの言語教育プログラムは正式な授業以外の形で存在している。学習言語に通じた高校上級生や大学生、父母、地域のボランティア等が教える始業時間前と放課後のプログラムがその類のものである。土曜学校には、継承言語や家庭での言語の維持や上達を望む学生がよく通っている。このようなプログラムは、資格を持った教師による授業がカリキュラム上存在していない場合に学習機会を補足することになる。

小学校で外国語教育プログラムを採用する地域が増加するに従い、学生のスタンダーズの到達度が拡大するよう、理路整然と継続した授業を行う義務が中学校の教師に生じるようになる。中学校の時間割の多様性は、学生の年齢相応の教育方針が次から次へと現れるのと同様に、授業をブロックに分けた時間割や、学期毎に交代する時間割、チーム・ティーチング、テーマ別の授業等、多種多様なモデルが見受けられる。

若い学生の中には、中学生になって、世界のある地域に興味を抱いたことから、そこで話される言語に新たに挑戦したいと思う者もいるかも知れない。中学校側は、学生がそれまで学習できなかった言語を初級から学習できるよう準備していかなければならない。第三言語を学習し始める思春期の子どもは、第二言語を学習し始める学生よりも明らかに有利である。第二言語習得経験のある学生は、単語が概念を表すと推測するよりも、むしろ、単語は概念を表すシンボルと理解している。学習者は、第二言語学習時に、「比較」の目標を目指すことにより、どのように言語が使われるかをよく考えるようになり、こういうことを理解していると、第三、第四言語を学習する際に違いが現れてくる。中学校、高校のプログラムは、学習時間の延長と早期学習開始は一般的に言語習得に有利であるという理由で拡大している。

### 9年生 - 12年生のプログラム<sup>訳注1</sup>

高校では、多くのプログラムが現在モデルとして存在するが、学区ごとに低学年で指導が行われるようになるにつれ、新しいプログラムの開発が見込まれる。残念ながら、今日でも多くの学生が高校生になって初めて外国語学習を経験するという状況であるが、近い将来、高校では主に第三、第四言語として語学学習を希望する学生が普通になるであろう。高校での学習が拡大すると、より一般的なモデルには次のようなものが考えられる。

- \* 全米試験の点数及び各大学の方針によって、大学の単位を認める可能性がある上級レベルのクラス
- \* 国際的な卒業証明書取得や大学の単位に備えたり、国際関係を勉強する学生を養成する国際バカロレア (Baccalaureate) コース
- \* 高校生が、大学から単位を出すことを認められた高校の語学教師による複数の授業を同時に履修するモデル
- \* 世界の言語を用い、言語としてのスキルを継続して発達させながら、同時に、その言語を媒介として他の分野の教科内容に重点を置いた上級レベルの授業

---

<sup>訳注1</sup> アメリカでは、州や学区により、高校は9年生から12年生の4学年制である場合が多い

- \* 世界の言語を、マグネット (magnet) あるいは特別プログラムとして学校の中に開設した学校というモデル
- \* 一定の分野 (例: 国際マーケティング、健康維持専門的職業) を通しての言語教育を強調している進学校やマグネットスクール (magnet schools) <sup>訳注 2</sup>

さらに、高校生が言語及び文化面での目標を見出すのは、(通常の学校以外の) 他の環境であることもよくある。

- \* 学校に通わず家庭で親から教育を受けている子どもの場合、そのような子どもを集めて、親が教えられる内容に加えて世界の言語を学習できる学校
- \* 集中的に一日、あるいは半日の授業で言語を指導する土曜学校プログラム
- \* アメリカ出身の子どもと地域に多く住む他国出身者の子どもが通うインターナショナルスクール
- \* 通常の高校の授業に組み込まれていない、話題を重視した授業 (例: 会話、ビジネス)
- \* サマーキャンプ、一週間、あるいは週末のイメージョンキャンプ
- \* 一年間あるいは夏期の交換留学プログラム

## 大学でのプログラム

21 世紀に大学に入学する学生は、第二言語や文化に通じていると思われ、語学や文化、文学、及びそれらの能力が求められる他の分野でも学習の継続を期待すると考えられる。また、学生は、今日のカリキュラムで選択できる以上のものを求めるようになることも考えられる。大学は新たな方法や革新的な方法でプログラムを作り直すという問題を既に抱えているが、学生の通訳や議論の技術が上達してきていることもあり、「カリキュラムに外国語を (Foreign Languages Across the Curriculum)」というような運動が発端となり、外国語プログラムはますます発展し、新たな局面を迎えようとしている。将来、学生は歴史、哲学、ビジネス、芸術の歴史、ジャーナリズムから看護学、エンジニアリング、科学に至るまで、広い分野で世界中の言語を使用できるようになるとされる。言語に関するこのスタンダードに大学でのプログラムを取り入れることにより、高校からのギャップのない継続学習、学生中心のプログラム、卒業時の高レベルの実践力が確実になる。

しかしながら、大学に入ってから語学学習を新たに始めたいと思う学生が常にいるのは昔と変わらず、基礎レベルの語学の授業も行う必要がある。多くの大学ではそれに応えるため、様々な言語で、初期段階の指導を行うことを主とする付属機関を通じて方策を講じている。

大学レベルスタンダードの実践によって、教師は新しいプログラムのオプションを開発するという特別な機会が得られる。大学入学以前からの継続学習により語学力が身につけている学生は、職業上の目標及び異文化間事業に結びつくような授業を要求するだろうし、多くの機関は、政治や歴史、経済等の言語学以外の授業内容を総合的に取り入れて、言語と文学プログラムを「言語研究」いう枠に拡大しつつある。他に広がりを見せる改革としては、ブリッジコース (Bridge Courses) とコンテン

<sup>訳注 2</sup> 学区の 1 つの学校に集中的に外国語コースを設け、磁石のように学生をひきつける学校のこと

トコース (Content Courses) がまず挙げられる。ブリッジコースが始まって 5 学期目、6 学期目に入るところが多いが、このコースは、映画研究、歴史、音楽史等の授業を語学専門教師が担当するので、その教科内容を通して語学の上達を目指す初級レベルの学習者に適していると思われる。一方、コンテンツコースは、教科内容学習に比重を置き、語学の授業というよりも、例えばドイツ語で行われる普通の授業といった方がいいだろう。これらの授業は、語学専門教師あるいは教科の専門教師が担当すると見込まれる。

最後に、学生が世界経済の中での就職に備え、職業的専門分野と伝統的な一般教養を組み合わせようとするにつれ、大学で 2 つの学位を同時に取得する学生の増加が見込まれる。2 つの学位同時取得プログラムは、学業と外国での研修を組み合わせ、学生が将来、国際的市民として活躍できるように、文化面、言語面、実践面で職業体験をすることができるプログラムである。

### 多言語学習の開始時期と継続性

ここに掲げられたスタンダードは、最高レベルの実践力達成には継続学習が理想的であることを前提とし、学習到達指標も指導が低学年時から高校まで (この版に収められている言語別スタンダードの大半は大学までの継続学習を想定) 一貫して行われると想定している。しかしながら、学校ではいくつかの理由により、カリキュラム上複数の開始時期を設けることが重要である。毎年世界の言語を体験させる目的は、学習言語の選択を狭めたり、学習を開始する機会を決められた時点に限定することではない。もし継続学習を推進することでひとつの学習言語しか設けない学区が現れるならば、学習者の利益にかなっていないことになる。

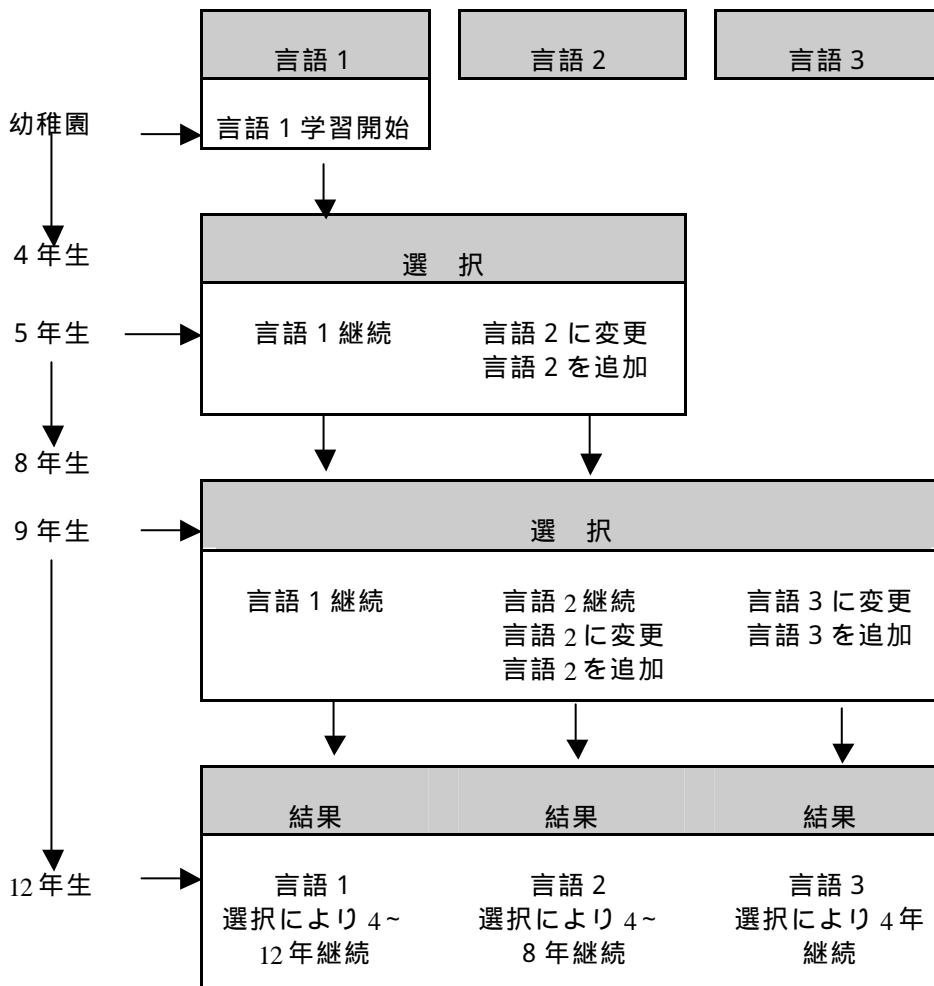
開始時期の複数設定は、学校に編入する学生、将来の就職や個人的な動機で中高校生時に特定の言語に興味を深めた学生、あるいはさらに別の言語の学習 (言語層化 (language layering) と言及されている概念) を希望する学生等にとっては好都合となる。低学年では、担当できる教師が限定されていることや学校の規模により、限られた数の言語しか設置できない地区もあるだろうが、中学校や高校では他の言語の設定は可能である。学生が大人に近づき、興味や動機が能力に現れる年頃には、学習者に選択させることが次第に重要性を増してくる。1 つの言語しか話せないアメリカの若者の問題は、彼らが将来の仕事や旅行で複数の言語や文化と渡り合う機会を考えると、第二言語として 1 つの言葉だけを設けても解決にならない。幼稚園 (K) から高校 (12) を通じ、さらにそれ以後も世界の言語の学習を継続する学習者は、スタンダードのあらゆる分野で高いレベルの能力を身につけるであろう。1 つ以上の世界の言語を学習する者は、継続可能な期間にふさわしい能力レベルに到達すると思われる。なぜなら、一般的言語学習経験により、第三言語は習得のスピードが早まることからである。さらに、教育上の利点を掲げるならば、2 つ以上の世界の言語を学習し、基本的な能力レベルを身につけることを目指している学生が実際到達できた目標は、言語を 1 つしか学習しない者と同等であったが、恐らく、前者は実践力になるとより高いレベルを身につけたと言えるだろう。

ニュージャージー州のために作成した枠組みでは、カリキュラムを検討した複数開始時期と言語層化を説明している。次頁の図 2 はそれぞれの学区が最大限の言語プログラムを計画した場合に参考になるとと思われる。



図 2 学習の複数開始時期と言語層化

以下の図表は学習の複数開始時期と言語層化の概念を描いている。複数開始時期は学年配置の仕方（例：K（幼稚園）?4年生、K?5年生、K?6年生、K?8年生（中学校2年生））により学区ごとに異なる。



主要な概念

- ・ 学生は1つ目の世界の言語（外国語）の能力が一定のレベルに達した場合、2つ目の世界の言語（外国語）を学習してもよい。
- ・ 学生は小学校で学習開始した言語の他に、中学校、高校で第二、第三の言語の学習を加えて（層化して）もよい。

“New Jersey World Languages Curriculum Framework( ニュージャージー世界の言語カリキュラムの枠組み)”  
(1999年、p.47) より

### 教育方法について

現在の研究及び教室での実践では、様々な方法を採用することによって学習者が十分スタンダードのレベルに到達できるということを示している。発展し続けている第二言語習得（SLA）における研究は、基本的に言えば、効果的な実践方法を見きわめてはいるが、それによりすべての答えが出ているわけではない。恵まれた才能のある学習者から知的障害を持つ学習者のグループまで、それぞれの

学習者に合った指導方法には、学習者の年齢や家庭での言語環境、学習嗜好、言語学習の目的等の要因によって大きな差異がある。学習者は、年齢に関わらず、それぞれ音韻システムや基本的語彙、文法の基礎、コミュニケーションのストラテジー、適切な言葉の使い方等を（意識的か無意識を問わず）身につけなくてはならない。幼少時に第二言語を学ぶ者は、それぞれの年齢に適切なレベルで自然にこれらの言語スキルや能力を習得する。それ以後の年齢になると母語をうまく使用できるので、学習環境に関係なく、母語での経験や能力とともにそれぞれのレベルに応じた認知力を第二言語学習に活かすことができる。つまり、何歳であっても学習開始が可能であるということである。認知力の発達は学習状況を左右する。たとえば、初めて第二言語を体験する年齢が15歳の場合よりも7歳の場合のほうが、学習者それぞれの動機、認知的発達、運動性発達、背景知識、自己認識における個人差を重視した指導方法を採用しなければならない。全米中の現場教師が用いる指導方法はそれぞれ異なるだろうが、スタンダード達成は推進できると思われる。

一般に、学習が困難な傾向にある子どもは第二言語学習においても成功しないという神話は、今や通用しない。逆に、すべての子どもが言語学習に適していることを認知した上で、目標が適切に設定され、目標が達成されるよう授業が組まれていさえすれば、子どもが期待通りに伸びて行くことは間違いない。

さて、指導方法の選択であるが、それは置かれた学習環境によっても異なる。学習言語の話者（例：母語話者）と学習者が直接対面してやり取りすることが不可能である場合は、テクノロジーやシミュレーション（simulation）また、従来の郵便（snail mail）を用いたペンパル等を通じて、母語話者と実際に言語を使用することが可能となる。それとは対照的に、第二言語使用が活発に使われる学校や地域では、教師が容易に言語環境を整備することができる。ラテン語や古典ギリシャ語の場合は、現代の話し言葉になっている言語とは異なる方法をとらなくてはならない。また、学習者の母語と多少関連する文字システムを持つ言語を学習する場合と、全く別の文字システムの読み書きを強いられる言語を学習する場合とでは、指導方法に差異がでるのは当然である（例：英語話者が中国語やアラビア語を学習する場合に対して、ゲルマン語系言語やロマンス語系言語を学習する場合）。

## 言語学習の特徴

教師や教育者の多くは、自らの担当教科や分野に関しては、歴史と芸術が、数学と音楽が異なるように、何らかの理由を挙げてそれぞれ担当する科目は特別であると言う。語学が他の科目と違い特別だと言える理由は、言語習得は正式な学校教育無しでも可能であるということである。世界中いたるところで、学校教育を受けず、しかも、ピアノやタップダンスのように誰からも教わることなしに母語を「習う」人はいる。さらに、この種の学習は才能によるものではない。メアリーは耳からピアノを覚えたとか、ホセは4歳にして、生まれつきの芸術家であるとか、ティナは5歳で自然に泳げるようになった、等はよく言われることであるが、兄とは違い、マリアには母語のスペイン語習得に優れた才能があった、とかは普通言われぬ。世界中どこを見ても、子どもが脳に何らかの障害がない限り、5歳までには母語が流暢に話せるようになるのが普通である。子どもは皆、学校教育に必要な認知力が現れるずっと以前に言葉が制御できるようになり、巧みに言語を使用するようになる。子どもは自然に、つまり意識的な努力なしに言語能力を身につけることができるのだろう。

子どもが第二言語を習得する際も、第一言語と同様の自然な学習が起こることが多い。その言語を話す国で生活するのが典型的な例であるが、子どもが学校外での環境におかれ、第二言語を耳にし、使用することで言葉を覚える例は数多い。繰り返しになるが、正式な授業も才能も重要ではないらしい。教育を受けない学習経験として、これらの言語習得のユニークな特徴は、数学や理科、社会、芸術、音楽、ダンス、演劇等、われわれが普通指導（学校や稽古ごと）を通してのみ、時として才能と指導の両方が必要な場合もあるが、学ぶことができると思える教科とは明らかに対照的である。

学習者の年齢が上がっても、言葉を覚える一番の方法は、ただその国に行き、正式な指導なしで自然に身につける、というような考えが今日でも存在している。それとは異なり、数学の学習には数学者と付き合い、芸術（studio art）を学ぶにはプロの芸術家と触れ合い、社会科を学ぶにはその社会に暮らすこと、などということはめったに言われない。

言語学習を正式な教育環境に当てはめても、言語習得の特徴がユニークであることに変わりはない。実際、その特徴は、言語学習を数学や理科、歴史等の純粋に理論的で、継続して学べる教科と同様に扱った場合は問題となる。数学を例に挙げると、学校のカリキュラムは、計算や問題解決を含む学生の数学的能力が向上するにつれて、ある程度定まったステップを踏んで上のレベルに進めるようになっていく。数学、生物、社会等の科目は次第に難解になる概念（算数から代数、代数から微分積分へ）を説明したり、または（その両方もあるが）まとまりのある事実の学習として教えたり、学んだりするであろう。一方、外国語は、言語に関する一連の事実（例：文法、語彙）を学んだとしても言葉を習得したことにはならない。学習言語を本物のコミュニケーションで使用できなければならない。つまり、文字で書かれた物の読み書きのみならず、学習言語を話し、他の人が言うことを理解して、複雑なやり取りができるようになってはいけないということである。コミュニケーション能力の習得には、文化とコミュニケーションの関係を中心にして、次第に複雑化する概念を身につけることが必要である。学習者の中には、この習得プロセスを自然に身の回りの環境で経験する者がいる。その言葉を話す人と頻繁に交流したり、外国で暮らしたりすることで他の言語に接するという訳である。また、教室内でこの習得プロセスが起こる学習者もいる。さらに、教室と実社会の両方で起こる者もいる。

このスタンダードは言語学習の目標は連続したステップに分けられないということを念頭に置いて書かれた。若い学習者が一貫性のない状態の言語に取り組む必要がなくなることを意図している。本物のコミュニケーションは、高校生にも可能であれば、それより年少の学習者にも可能なはずである。それぞれの学年、たとえば、4年生、8年生、12年生の段階での到達指標作成においては、学習者の学年相応の認知力、精神発達度、興味における違いを考慮に入れ、すべてのレベルのスタンダードにおいては、学習言語を通じ、学習者に何が分かり、何ができるかについての見解を示している。

## 外国語学習スタンダードについて

外国語学習スタンダードは幼稚園（K）から高校（12年生）までの外国語教師に限らず、教員指導者やカリキュラム作成者、学校経営者、あらゆる行政団体内の政策起案者、父母、実業会及び地域のリーダーに至るまでの多様な読者を想定して作成された。このスタンダードの目標は、外国語学習者が高校卒業の時点までに何を知り、何ができるようになるべきかを読者に説明することであり、学習者がそこに至るまでの方法をこのスタンダードが規定しているわけではない。むしろ、その長い道のりを指導するという責務を負った方々の道標となることを願って作成された。

### 「外国語」という用語の使用

米国内において、英語以外の言語を教える際、「外国語」の「外国」という用語がますます問題になってきている。アメリカ国内の学校で教える言語の多くは、学習者の大半にとっては「外国語」ではないのが実状である（例：イタリア語、中国語、スペイン語等）。多くの州がこのような状況を考慮し、それらの言語を世界の言語（World Languages）、近代・古典言語、英語以外の言語（Languages Other Than English、略してLOTEs）、第二言語などと呼んでいる。このスタンダードの実行委員会のメンバーがこの問題について3年もの間何度も討議した結果、読者に分かり易いという理由で、「外国語」という用語はこのスタンダードのタイトルとして残ることとなった。しかし、スタンダードの中ではできるだけ「外国語」という用語は避けることに決定した。従って、このスタンダードでは、「第二言語」、「学習言語」、時折単に「言語」というような用語が交互に出てくるが、それはすべて学校で教えられる英語以外の言語を指している。

### 構成と定義

外国語学習スタンダードは、外国語教育を構成する5つの**目標領域**（コミュニケーション、文化、コネクション、比較、コミュニティ）を柱に成り立っている。これらの目標は、それぞれが相互に関連しているため、ひとつだけ取り上げて教えることはできない。各目標領域には外国語教育の一部として取り入れられている理論的根拠があり、その定義及びそれに関する重要な指導上の課題も議論されている。

それぞれの目標領域には2、3の**内容スタンダード**が記されているが、それらは学習者が高校卒業時まで身に身につけておかななくてはならない知識と能力について述べたものである。さらに、各スタンダードにはそのスタンダードが目標領域の中でどのように位置づけられているか、及びそれをさらに説明するための簡単な議論が付記されている。

また、各スタンダードの下には、4年生、8年生（中学2年生）、12年生（高校3年生）段階での**到達指標のサンプル**が載っており、学習者の学習状況をスタンダードに照らし合わせて見ることができる。しかし、それ自体がスタンダードではないことに注意しなければならない。到達指標のサンプル

はそれに合わせて学習者が習得しなければならないものでもないし、発達状況をすべて網羅しているものでもない。また、多くの言語に応用できるように考えられているが、すべての言語に応用できるとは限らない。それは実際に、学習者があるレベルに達すると遂行できる事柄であり、内容としては他の様々な事柄が指標となり得る。到達指標のサンプルはあくまでサンプルであって、他にも様々な指導方法が考えられる。カリキュラムを作成する者及び現場の教師は、それぞれに合った指導方法で実践できるようにそのサンプルを参考にして頂きたい。到達指標サンプルはまた、様々な方法で測定が可能であるが、州や学区が学習者にどの程度の実践力レベルを求めるかを定める際にも利用できるであろう。

## 外国語学習スタンダードの活用法

この新しく編集された「外国語学習スタンダード」は、多くの読者を想定して作成されたが、その作成における目的も多様である。まず、このスタンダードを使用する前に、このスタンダードが何であるかというより、何でないか、を理解して頂きたい。最も大切なことは、このスタンダードは、この国の外国語教育の現状を述べているものではないということである。国内の最も優れた学習状況については描かれているが、外国語学習者の大半が学習により得たものが何であるかについては書かれていない。今お読み頂いている数ページに記載されているスタンダードは、一朝一夕に到達できるものではない。むしろ、これから数年に渡って、外国語教育がどのように向上していくかを読み取るためのものさしとして考えて頂きたい。

まず、このスタンダードはカリキュラム作成のガイドではない。このスタンダードでは、学習者がスタンダードを達成するのに必要とされる内容、及びカリキュラムの種類が提示され、継続した学習を支持してはいるが、具体的な授業内容を述べているわけでも、どのような範囲でどのように継続すればいいかなどを説いているわけでもない。

また、このスタンダードはこれ1つでは成り立たないことを読者は銘記して頂きたい。個々の学区や学校で、学習者に適したアプローチや何を期待するかを決める際には、州や地域のスタンダード及びそのやり方を考え合わせて活用しなければならない。図3が示す通り、それぞれの枠が相互に影響し合っていることを理解の上、学校経営者、教師、父母、その他の人々が、将来の学習者が世界の言語を身につけ、世界的規模で活躍できるように一丸とならなくてはならない。

図3 ナショナル、州、地域ごとのスタンダードとその相互関係

ナショナル・スタンダード	州の枠組	地域の カリキュラム	授業・単元の 指導計画
目標領域 ? ? スタンダード ? ?	指導目標 ? ? スタンダード ? 内容 ? 単元の種類 ? 内容構造	地域の指導目標 ? ? 内容 ? 指導する単元ごと ? の詳細 ? 望ましい単元及び ? 順序 ? 指導法 ? 参考資料	学習の具体的な 目的 ? 内容 ? 授業の詳細 ? 単元のトピックと ? 授業手順 ? 単元ごとの授業用 ? 指導・学習資料
到達指標サンプル ? ?	推薦される ? 評価手順 ?	評価方法のテクニ ? ックの詳細 ?	目的及び評価の詳 ? 細

“Visual Arts Education Reform Handbook: Suggested Policy Perspectives on Art Content and Student Learning in Art Education”（ビジュアルアーツ教育改革ハンドブック：芸術教育における芸術内容と学習に関する政策的見解 / 1995）National Art Education Association（全米芸術教育協会）の承諾により、内容を変更の上使用

### スタンダードと各言語の独自性

すべての言語に当てはまる一般的なスタンダードの議論に続き、中国語、古典、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語と、それぞれの言語独自の学習に関する項が設けられている。すべての言語について当てはまることは第1部で十分議論されているので、各部の解説に際しては省略されている。一方、各言語独自のスタンダードは、言語間の差異を調整した内容になっているが、それぞれの言語には、独自の語彙、文の構造、音韻システム、文字、文化があり、英語を話す学習者には程度の差はあれ、どれを取っても難しいことは確かである。その中で、各言語別に定められた目標や実際のスタンダードに共通していることは、それぞれの分野が、第二言語学習の必要性及び目的に照らして適切であると判断した内容になっていることである。

それに対して、到達指標のサンプルは流動的である。アルファベットを使用しない言語の学習者を例にとると、英語に近い言語を学ぶ場合に比べ、書き言葉に関する到達指標に到達するには学習に要する時間が多くなると考えられる。スタンダード作成当初は、4年生、8年生、12年生の段階での到達指標を提示することになっていたが、各言語協会はその指標を大学教育まで拡大したため、このスタンダードには16年生（大学4年生）時の到達指標サンプルも収められている。また、学習時間増加の要因として、ヨーロッパ以外の言語を学習する場合は、ヨーロッパの言語を学習する際に比べ、明らかに文化の違いがある。似たような難しさは視覚言語（例：アメリカ手話(American Sign Language)）や、現在では話し言葉としては存在しない言語（例：ラテン語、古典ギリシャ語）、文字を使用しない言語（例：アメリカ原住民の言語）を学習する際にも起こる。

各言語独自の項は、なぜ学習者とその言語の学習を希望するかを、文学、ビジネス、国際交流、米国内での歴史及び現在の状況、その他の重要な理由を挙げて議論している。重要なことは、これらの

項が学習シナリオを提示し、教師がスタンダードに沿ったカリキュラムに移行するための手助けとなるということである。学習シナリオは、現場の教師が言語独自のスタンダードを作成するグループに、実際の教室内のアクティビティーとして提出したものに基いている。それぞれのシナリオは、学習目的とするスタンダード、実際に教室内でアクティビティーを行った際の状況、そのアクティビティーがどのスタンダードに対応しているかを内省したものが含まれている。多くの学習シナリオで、年齢や学習レベルが違った場合のアクティビティーを採用する際の助言となるものも付記している。

### スタンダードと継承言語の学習者

学習する言語を家庭で使用している学習者にスタンダードを応用する場合、各言語のスタンダードをそのまま使うことはできないので、上記に述べたことを考慮し、修正をしなければならない。前述の通り、学習者の中には、家庭や自宅近所では言葉を話すことができる者がいるかも知れないが、正式な場所で十分に会話できるだけの能力を持ち合わせていない者もいる。さらに、話すことはできても、読み書きになるとおぼつかないということもある。繰り返しになるが、学習者の背景を理解することは、このスタンダードを実践する上で重要なことである。

## 構成上の基本原理(Organizing Principle)

以下に述べられているのは、本外国語学習スタンダード作成にあたり掲げられた3つの主要な基本原理、すなわち、「広範な言語教育の目標」、「スタンダード到達に必要なカリキュラム要素」、及び本書の構成上骨子となる「コミュニケーション形態の枠組」である。

### 外国語教育の目標領域（5つのC）

学習者が一人ひとり異なるのと同様に、外国語を使用したり、学習したりする目的は多様である。国際的なビジネスや政府関係の仕事に活躍できる場を求めて英語以外の言語を学習している者もいれば、言語学習に知的刺激を求める者やそれを自己の認知力を高める手段としている者もいる。また、異なる民族や文化へ対する理解を深めることを目的としている者もいる。しかし、学習者の大半の目的は、他の教科と同様に、単に卒業単位を満たすためというのが現実である。そうした中で、学習者は学習の目的が何であれ、外国語を学習することにより何らかの恩恵を受けていることも事実である。そこで、スタンダード実行委員会は、このような学習者の目的の多様性と外国語学習のもたらす利益を念頭に置き、5つの目標領域、「コミュニケーション (Communication)」、「文化 (Cultures)」、「コネクション (Connections)」、「比較 (Comparisons)」、「コミュニティ (Communities)」を打ち出したのである。

英語以外の言語を通じてのコミュニケーション、つまり、相手と向き合って話したり、文書を書いたり、何世紀もの時を超えた文学を読んだり、コミュニケーションの形は様々であっても、コミュニケーションが第二言語学習の中心であることには間違いない。他の言語を学習することによって、言語と密接に関係のある文化を理解するようになっていられると言われていたが、人々が言葉を使用する裏にある文化的背景を完全に理解できるようになって初めて、本当にその言語をマスターしたと言える。また、言語学習によるメリットは、母語しか話さない者には得られないような方面の知識が得られるということでもある。さらに、学習言語と母語を比較することにより、自己の言語と文化に対しての洞察力を深めると同時に、世の中を多様な視点から見られるようになる。このような事柄を包括的に習得することによって、学習者は様々な状況において文化的に適切な方法で、自分の身の回りと世界中にある多言語コミュニティへ参加できるようになると考えられる。このような5つの目標はそれぞれ密接な関係にあり、切り離すことができない。次頁の図4はそれらがどのような相互関係にあるかを示すと同時に、我々が日頃使う言語がいかに豊かであるかをも物語っている。

言語学習をより高い次元から見ると、**すべての**学習者が外国語教育により恩恵が得られるということが明らかになる。それぞれ授業内容の教育的、職業的目標は異なっても、5つの目標領域をすべてカバーするような外国語教育を目指すならば、学習者の誰もが言語教育によって恩恵を受けられる。卒業後は、学習した言語を話す機会がない学習者であっても、その後の人生において、身につけた異文化スキル (crosscultural skills) や知識、洞察力を維持することによって、伝統的な国境という概念を超えて世界中の人々との交流が可能となるはずである。



図4 外国語学習の5つのC



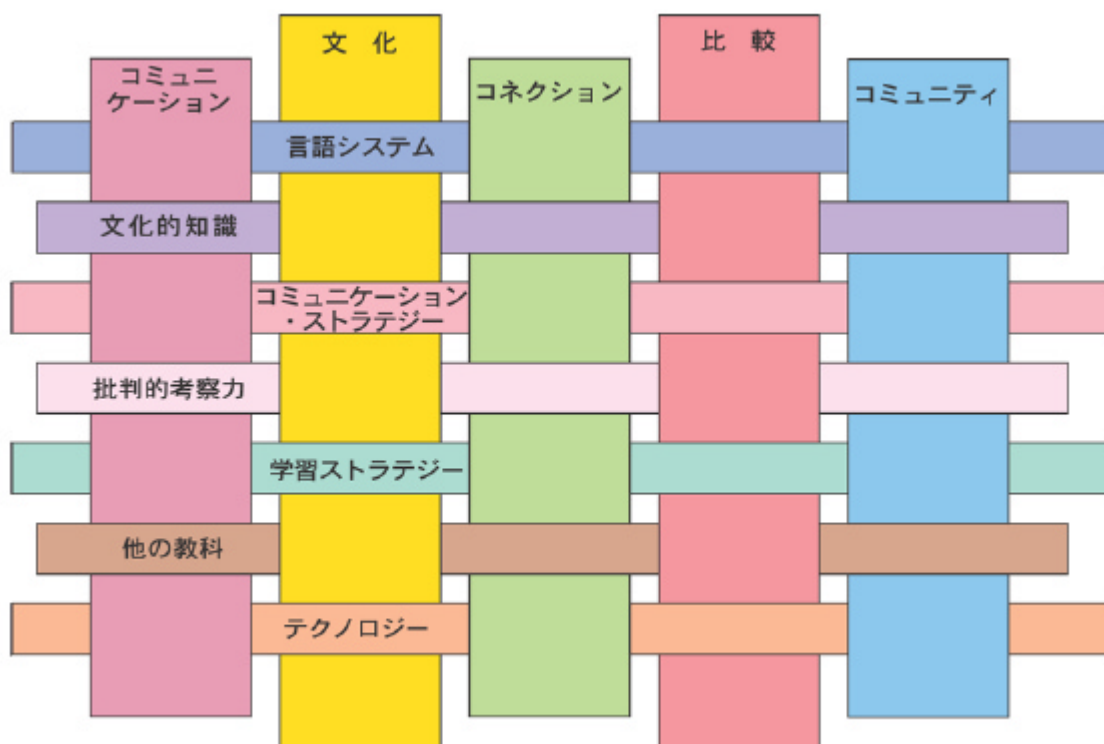
#### カリキュラム要素の組み入れ

本スタンダードは、学習者が学習する言語で何が分かるようになり、何ができるようになるべきかについての見解を示している。これらのスタンダードに到達するためには、授業内容について多方面からの考慮が必要である。かつて、語学の授業と言えば、大半は単語と文法事項の暗記が中心であった。本書のスタンダードでは、外国語の授業に広範な内容を取り入れることの必要性を説いている。つまり、学習者は、従来の言語システム及び文化の要素の学習だけでなく、コミュニケーション・ストラテジーや学習ストラテジー、批評的考察力 (critical thinking skills)、テクノロジーの技能等を学び、試行し、使用する機会が十分与えられなくてはならない。本書では、これらの要素がそれぞれどのような形、内容であるかについては細かく定めてはいない。教師自身が各々の授業にこれらのスキルを組み入れられるよう、それぞれの背景や枠組みを説明しているに過ぎない。

## 言語システム

言語システムの学習とは、大半の大人が外国語の学習と言えば思い出すようなことではあるが、単語、文法、動詞の活用の暗記や、文字を学習し、聞きなれない音を発音したりすることと言った方が分かり易いであろう。これらの要素が外国語の授業で重要であることに今も変わりはないが、それらの暗記から、それぞれどのような意味を持つかを知ることへと重点が移った。すなわち、言語システムは、学習の結果、このスタンダードで示しているコミュニケーション、異文化理解、他の教科との関連に至るための手段である。また、言語システムは単語や文法に留まらず、身振りや他のノンバーバル・コミュニケーション (nonverbal communication)、相手との対話、及び「いつ、だれと、何を話すか」という社会言語学的要素も含んでいる。これらの要素は言語と文化の橋渡しをするものであり、状況に合った言葉の使い方を学習しようとする者に教えなくてはならないものである。学校の授業で学習する言語システムの要素の詳細は、言語ごとに異なるのが普通である。例えば、言語によっては新しいアルファベットをすべて学ばなくてはならないものもあるし、母語と異なる文字を2つ、3つ教えるだけでいいという言語もある。また、言語の中には文の構造が全く異なるものもあれば、学習者の母語に近いものもある。この言語独自の詳細については、言語別のスタンダードで述べられている。

図5 カリキュラム要素の組み入れ



## コミュニケーション・ストラテジー

言語システムの知識だけでは、実際のコミュニケーション活動には不十分である。そのため、言語と文化の差異から生じるコミュニケーションのギャップを補うために必要な、コミュニケーション・ストラテジーに重点を置いた細かい指導が必要となる。このストラテジーは、将来身の回りや職業上遭遇する言語や文化を学習する際に大変役に立つと思われるが、主に以下の能力を指して言う。言いたいことを別の表現で言い換えたり、相手が言おうとすることを理解するために、既に持っている知識を最大限に活用して推測すること。状況から意味を判断したり、効果的に身振りをうい、また相手の身振りを理解、解釈すること。間違いを恐れることなく相手の発言に説明を求めたり、自分の発言を説明すること。自分の立てた仮説を試し、相手が何を言おうとしているのか推測、予測したり、一般化すること。また、相手とのやり取りを冷静に見つめ、結論は何であるかを考えること。さらに、やり取りの中で適度なユーモアと忍耐を維持し、最後まで会話を続けようとするなどである。

学習者の中には、このようなストラテジーの大半が生まれつき備わっている者もいるかも知れないが、相手の伝えようとする意味を解釈し、自分の意志を伝達するための具体的なストラテジーの使い方についての指導を必要とする者もいるだろう。従って、教師は言語学習の初期の段階から、授業の一環として学習者がこれらのストラテジーを学び、練習できるように教室内活動に工夫を凝らさなくてはならない。

## 文化的内容

言語を学習する上で、言語システム以外に、言語の背景にある文化について学ぶことも必要である。その言語を話す人々の日常生活や慣習、文化的に重要な歴史上の出来事や現代の事情、重要な文学、芸術作品、文化的傾向及び趣向等について学習することは欠かせない。それと同時に、学習者自身の文化が学習言語を母語とする人々によってどのように評価されているかを知らなくてはならない。現実として、教師がある言語の文化的背景をすべて知っているということもありえないし、学習者がある文化的要素をすべて学習できるということもありえない。しかし、相手の文化に配慮し、意味のあるやり取りができるようになるためには、重要な文化的特徴やものの考え方を判断するのに必要なコミュニケーション・ストラテジーを身につけ、それらのストラテジーを自分で適宜使い分け、解釈できるようにならなくてはならない。繰り返しになるが、学習すべき文化的要素は言語により、または同じ言語でも異なること（例：スペイン語圏やフランス語圏の文化の多様性）を念頭に入れなくてはならない。

## 学習ストラテジー

言葉を学ぶには、学習者が積極的な態度で臨まなくてはならない。研究調査によると、語学を効果的に学習できる者は、自分がどのように学び、また学んだことをどのように維持し、応用するかでそれぞれのストラテジーを使い分けていることが明らかに示されている。学習する際にこのようなストラテジーを教わることで、より効果的な学習ができるようになり、さらには自分の学習を制御できるようにもなり得る。教師が計画、直接指導できる学習ストラテジーには次のようなものが挙げられる。学習への集中力の向け方の指導。次回の学習内容を手短に聞いたり、読んだりして、内容の要旨をつ

かませるなどして、次回学習することを前もって整理させること。学習したばかりのことを振り返り、まとめさせること。相手の発言に対してどのように説明を求めるかを教えること。記述してあることから情報を推測させること、等である。学習ストラテジーを効果的に用いる学習者は、自ら言葉を学習していることを自覚するようになり、自分の学習に責任を持つようになると言われる。既にある程度、効果的に学習ストラテジーを利用できるようになっても、さらに学ぶべきストラテジーは多く、学習ストラテジーの恩恵を受けない学習者はいない。このようなストラテジーは言語学習だけでなく、他の教科にも応用が効くということを考え合わせると、言語学習ストラテジーの領域を拡大することは言語プログラムに欠かせないことである。学習者は教室を去ってからも、自分に一番合ったストラテジーを生涯の学習に応用できるのである。

## 他の教科内容

学習者には、学習言語が次第に上達するにつれ、習得した技能を用いて読んだり、議論したり、分析できるように、学習者の興味をそそり、かつ、多少難しい話題や問題を与えなくてはならない。学校の授業でとり扱う話題や問題は、語学の授業以外のカリキュラムからも利用できる。広範なカリキュラムから必要に応じて内容を引き出すのは、小学校の外国語教育では長い間行われていることであるが、中学校以上の授業でも同じような効果が得られると思われる。科学や社会、数学、音楽等からものの見方や考え方を取り入れることによって、教師は学習者の言語学習を助けるのみならず、他の領域での知識も増進することになる。

## 批評的考察力(critical thinking skills)

言語学習過程を通じて、学習者はものごとを識別させる (identification) 作業や想起、記憶させる (recall) 作業等の基礎的な作業から分析及び問題解決の作業へと、学習段階の初期からより高度なレベルまで、様々な批評的考察力を用いている。外国語の授業は、他の教科に劣らずこのような技能を発展させるように計画されており、高度なレベルの思考作業 (tasks) を取り入れるような活動が組み立てられている。学習者は実際のコミュニケーション・タスクを行う上で何が必要かを見出せるようになり、既に備えている知識を活用し、さらに新しい作業に臨むのである。それと同時に、参考になる様々な文献を調べたりする能力も身につけ、作業の実践に新しく得た知識を取り入れる。文化的課題や問題が持ち上げれば、それを見出し、順序良く考え直し、分析し、どのような意見が述べられているか、どのように結論づけられているかを理解し、そして、問題への解決法を提示するようになる。また、自分達のコミュニケーションの質、出来ばえを冷静に振り返り、分析し、将来の外国語でのやりとりを効果的にすることもできる。ここで肝に銘じて頂きたいのは、母語で作業を行うことによって、初級のクラスでも批評的考察力を用いることが可能であるということである。

## テクノロジー

テクノロジーが目覚しく進歩している中で、語学の学習でもそれを利用する機会を設けないことはない。コンピュータを利用した指導 (computer-assisted instruction) からインタラクティブビデオ (interactive video)、CD-ROM、インターネット、電子メール、ワールド・ワイド・ウェブ (WWW)

等に至るまで、テクノロジーに接することにより、定期的に仲間とやり取りすることで言語スキルを発達させ、さらに学習言語を話す国での現代の文化や日常の生活を学ぶようになると思われる。さらに、ラジオの短波放送や衛星放送の番組、カセットテープやビデオの録音、録画を通じて、学習する文化についての知識を深めることも可能となる。

テクノロジーが語学教室の中で活用される状況は全国的に拡大している一方で、従来通りの方法で学習言語に触れる学習者も依然として多い。学習者の年齢、言語能力、教室内の資料に応じてだが、(語学の授業はペンパルとの文通や子ども向けの文学や出版物、雑誌、新聞、ベルレター (belles-lettres)、日常の文書 (列車時刻表、メニュー、広告、地図、その他) 図書館の参考文献 (百科事典、辞典) などの様々な印刷物に頼って進められているということもありうる。しかし、テクノロジー、あるいはその他の手段を通じて本物の言葉に触れることが、学習上の基礎的知識を固める点で有益なことには間違いない。

### コミュニケーション形態 (Communication Modes) の枠組み

これまでに、様々な分野の研究者が言語能力の特性を探り、言葉を「知っている」とはどういうことなのかという問いに答えを求めてきた (de Jong and Verhoeven 1992)。この問いに対し、言語学の初級教科書の大半 (Fromkin and Rodman 1993) が、言葉を知っているということには、その言語を用いて様々な作業をこなす能力が含まれる、という解釈を示している。言葉を知っているということは、その言葉を話し、その言葉を知っている他の人々に自分の言うことが通じなくてはならない。どの音はその言語にあって、どの音がないかが分かり、ある音の連続が意味のある単語になることが分かり、単語が組み合わさって句ができ、句が集まって文が成立する、などの知識がある。また、耳にしたことのない文でも聞けば分かり、自分でも文が作れるということでもある。さらに、言葉を知っているということは、その言葉の言語システム (統語論、形態論、音韻論、意味論、語彙論) を制御できるということでもあり、ある特定の文化的状況で、その場にふさわしい方法でコミュニケーションの目的を達成できることを含めて、その言語の文字や実践的、社会言語学的な点にも通じていなければならない (Backman 1990; Savignon 1983; Canale and Swain 1980; Hymes 1985; Bialystok 1981)。

コミュニケーションは様々な方法での特徴づけが可能である (Schiffrin 1994)。本スタンダードで提案しているアプローチは、コミュニケーションの状況と目的を最も強調した (Brecht and Walton 1994) 3つの「コミュニケーション形態」を認識することである。図6で示す通り、3つの形態は(1)相手とのコミュニケーション、(2)相手をどのように解釈するか、(3)相手にどのように自分の意見を伝えるか、である。各形態は文化的背景と言語の関係に密接に関わり、時代と共に変化する。

図6 コミュニケーション形態の枠組み

	対人関係	解 釈	意見発表
定義	個人的に直接、口頭でコミュニケーションをとること（例：相手との面会、あるいは電話）	口頭で、あるいは文書でメッセージを受けること	口頭あるいは文書で表現し、コミュニケーションすること
	個人的に直接文書を取り交わしてコミュニケーションをとること	印刷物、あるいは印刷物以外のものを媒介としてのコミュニケーション	一方通行の、あるいは直接交流のない一般の人々（視聴者等）向けの口頭あるいは文書でのコミュニケーション
		制作者がいない状況で、視覚的、あるいは録音した作品を見たり、聞いたり、読んだりすること	視聴者及び読者と直接接触することのない視覚的、録音した作品の制作者等
方法 (paths)	表現能力 スピーキング、ライティング 受動的な能力 リスニングリーディング	主な受動的な能力 リスニング、リーディング 見ること（viewing）	主な表現能力 スピーキング、ライティング 見せること（showing）
文化的知識	年齢、社会的地位、プロフィールが異なる個人間のやり取りを左右している文化的背景に関する知識	文学的、芸術的所産・産物にいかなる文化的な背景があるか等の知識	話者とその聞き手、または作家とその読者間でのやり取りにおける文化的背景の知識
	コミュニケーションの方法が言語によって異なることを認識する能力	文化的、芸術的所産・産物にいかなる意味が込められているかについての知識	読み手、聞き手に合わせて異文化間（crosscultural）情報を発表する能力
	相手とのやり取りの方法が文化によって異なることを認識する能力	内容を分析し、入手できる自分の母語による情報に照らし合わせ、言語的、文化的差異を評価する能力	相手とのやり取りの方法が文化によって異なるということを認識する能力
		ある文化における内容をアメリカの文化と分析、比較し、解釈する能力	
<b>言語システムの知識</b>			
文法、語彙、音韻、意味論、実践論、談話等の特徴に関する知識がコミュニケーション形態で必要とされる。			

### インターパーソナル(interpersonal)形態

インターパーソナル形態とは、対話の相手との積極的な意味のやり取り（negotiation of meaning）によって特徴づけられる。すなわち、コミュニケーションする者は、発言の意味及び真意が相手に伝わっているか、お互いに観察し合い、状況に応じて言い方を変えたり、相手に分かるようにさらに説明を加える、ということである。このような特徴を持つ形態は、結果として、他の2つの形態よりもコミュニケーションの目的達成の可能性が高くなる。インターパーソナル形態が関わるのは、主に会話においてであるが、対人関係や相手とのやり取りという点では、個人的な手紙や電子メールなどの読み書きを通して実行できる形態である。

## 解釈 ( interpretive ) 形態

解釈形態とは、相手との意味のやり取りができない書き言葉や話し言葉において、相手の真意や発言の意味を解釈する際、文化的に適切な判断ができることに焦点をあてている。そのような一方通行のリーディングやリスニングは、文章や映画、ラジオ、テレビ放送、スピーチなどで起こる。口頭での伝達を聞くにしろ、読むにしろ、外国語の文章に込められた文化的意味の解釈は、母語話者が文章を理解するのとは意味が異なることを忘れてはならない。言い換えるならば、解釈とは、行間を読む（あるいは聞く）能力を示唆するという点において、理解と異なると言える。

解釈形態では、話し手と聞き手、あるいは書き手と読み手の間で可能な意味のやり取りができないので、はじめから文化に関する深い知識が要求される。他の言語や文化を知れば知る程、口頭、あるいは書かれた文章を適切に解釈できるようになると思われるが、文化への造詣や行間を読んだり聞いたりする能力は、その言語や文化に触れるうちに、時間と共に次第に養われるということを明記しておく。

## 発表形態

発表形態とは、2つの異なる文化を背景に持つ者同士が、意味のやり取りを通じて、直接相手の言いたいことを確認し合ったりできない場合に、相手の解釈を助長する方法でメッセージを送ることを指す。例を挙げると、レポートや記事を書くこと、スピーチの発表などである。これら「一方通行の」書いたり、発表したりする例は、はじめから相当な言語及び文化の知識を必要とする。なぜなら、文化が異なる相手である読み手や聞き手がうまく行間を読んだり、聞いたりできるようにしなければならないからである。

## コミュニケーションの枠組みと学習者のプロフィール (background)

学習者が初心者であろうと、家庭での会話に学習言語を使う者であろうと、このコミュニケーションの枠組みが役に立つことには変わりはない。継承言語の学習者は学習・家庭言語においては、優れた対話コミュニケーションのスキルを見せるかも知れないが、解釈形態及び発表形態における言語能力を向上させる必要があると思われる。様々な学習者のニーズに応えるためには、次のような事柄に重点を置いた指導が必要とされる。(1)現在の時点において、学習言語で得意とする部分の維持、(2)家庭環境では発達が望めない話題領域 ( topical areas ) の強化、及び(3)学習言語の読み書きで使用。

ここに掲げられた外国語教育の5つの目標領域は、教室内だけで語学の学習を始め、続ける学習者と同様に、家庭言語及び継承言語学習者にも重要である。特に、家庭で使用する第一言語を学校の教科として勉強する者にとっては、本書に提示されている目標並びにスタンダードに準拠した指導を受けることによる恩恵は大きい。本書で目標及びスタンダードとしていることは、(1)コミュニケーション能力の伸長、(2)継承言語を話す国々に住む人々や文化についての知識を得る機会の設定、(3)学術的な状況において新しい情報や知識を得るための家庭言語の使用、(4)日常的に接する2つの異なる世界におけるものの見方や考え方の認識、(5)言語に精通する者として、米国及び海外で活動する能力の拡大。

## コミュニケーションの枠組み及び学習する言語の性質

コミュニケーション形態の枠組みを使うことは、非ヨーロッパ系言語を学習する者が直面する問題を明らかにすることでもある。人と向き合ってやり取りする過程は、ヨーロッパ言語の話者には馴染みのない能力が必要とされるため、文化的距離が大きい相手とやり取りする形態では大きな負担となる。同様に、解釈形態並びに発表形態で最終的に必要とされる文化的知識の量は、ヨーロッパ系言語（例：英語）の学習者が他のヨーロッパ系言語（例：イタリア語）を学習する場合に比べ、非ヨーロッパ系言語を学習する方が、莫大なものになると推測される。

言語の知識と使用を強化するという観点からは、恐らく発表形態にも注意を要するだろうが、ラテン語のような古典の学習では、解釈形態が中心になると思われる。また、古典の学習では、口頭でのスキルの発達にも配慮がなされるが、対話や交渉をする母語話者がいないので、そのような口頭での作業がインターパーソナル形態の一部として扱われることはほとんどありえない。



# コミュニケーション (Communication)

## 英語以外の言語でコミュニケーションを行う

### 理論的根拠

急速に相互依存が進む 21 世紀の世界において、アメリカ人の学生にとって、英語以外の少なくとも 1 つの言語でコミュニケーションを図る能力を身につけることはますます重要となってくる。多くのビジネス・経済界の人達は、教育界に対し、学生が社会に出るまでに外国語の能力を身につけさせておくよう要求している。また、彼等は学生がある言語について、文法の説明ができ、動詞を活用できるだけでは、不十分であるとも言っている。21 世紀においては、学生は外国語を自ら話し、読み、話し言葉及び書き言葉を理解できなくてはならない。また、他の社会のメンバーと実際に会った時に、適切に意思疎通を図り、メディアや文学作品などを通して、その社会のメンバーのものの考え方や意見を解釈できなくてはならない。

### 論点

外国語で適切なコミュニケーションを図るために、学生はその言語自体を操れるようになり、その言語が使用される文化に精通し、そして言語と文化の両者がその社会の中でいかに相互に作用しているかの認識を持たなければならない。学生は、様々な事象や考え方を第 2 言語を通して表現または解釈するために、上述の知識を応用する必要がある、また他の文化を観察することによって熟考せねばならない。よって、このコミュニケーション目標におけるスタンダードの到達は、他のスタンダードを遂げる上でも中心的な意味を持つ。

コミュニケーション目標において高い水準を満たすには、学習者は学習言語の母語話者が使用する話し言葉、及び書き言葉と接する機会を十分に持たなければならない。実際に使用される状況下での意味のある言語が、表現スキルの上達のための基礎となる。言語を扱う技能や文化を理解する能力は様々な分野で養うことができるが、実際に使用される文化状況における言語システム習得の基礎固めのためには、学習者が彼等の年齢に適合し、かつ興味を持てるような教材に囲まれることが重要である。異なった文化の中で育つ者は、第一言語を特定の文化状況において習得する。よって、そうした者は、新しく習得する言語で効果的にコミュニケーションを図るために、自身の第一言語・文化と比較できるような文化的構成概念や振る舞いを学習しなければならない。

言語システムと文化の学習に加え、学生は自身のコミュニケーションの効果を増すためのストラテジーや、言語的、文化的に至らない点を補うストラテジーを用いて言語運用能力を高めなくてはならない。外国語のクラスでは、学習者が言語及び文化面で困難に感じる点に安心して取り組める場を提供すべきである。また、第二言語習得の分野は、学習者がリーディング、リスニング、スピーキング、ライティング、また他の文化を観察し、分析するための効果的ストラテジーを意識的に身につけるときに同様に促進される。

## コミュニケーション能力(Communicative Competence)

第二言語習得における最も重要な目標の1つに、英語以外の言語でのコミュニケーション能力の発達があげられる。コミュニケーション能力を身につけた者は、様々な種類のメッセージをうまく伝え、受けとることができる。こうした者は、言語を用いて、日常的なやり取りを交わし、他者との社会的関係を築くことができる。また、対話者の年齢、背景、学歴などを考慮した上で、効果的に会話、議論、批判、要求、説得、説明などができる。こうしたことに加え、書物やメディアを通して情報を収集し、その目的、状況、文体などを考慮に入れてその情報を解釈する。つまり本質において、コミュニケーション能力の持ち主は、意味のあるメッセージをうまく伝え、受けとるために、言語システムの知識を文化的なしきたりに関する知識、丁寧さを示すための規範、会話における慣習等と結びつける。

コミュニケーション能力を身につけるために、学習者は学習言語の使用される文化において、人間の相互関係がいかに関係され、様々な目的達成のためにどのようにして言語が効果的に使用され、会話における慣習がいかに関係し、話し言葉と書き言葉がどのように構成され、そしていかに関係して言語システムそのものが営まれているのかを学習しなければならない。学習者は、意味あるメッセージを伝え、また受ける際に、こうした知識を「同時に」織り込まねばならない。

第二言語の学習者は、第一言語でのコミュニケーション能力を身につけた際の洞察力を用いる。彼等は、第一言語において他者の個人的情報を聞き出す方法、議論の方法、物事を描写する方法、そして説明する方法を知っている。また年齢によっては、書物やメディアから情報を収集し、解釈することもできる。よって、第二言語を学習する際、彼等は既に意味を効果的に伝える方法は知っていることになるが、それを新しい言語システムを用いて、そして第一言語とは異なる人間の相互関係のルールに基づいて行うことを学ばなければならない。

## 外国語において学習者がコミュニケーション能力を身につける方法

長い間信じられてきた考えに反し、現在では学習者が初めに言語システムを学ぶことによってコミュニケーション能力を習得しないことは周知の事実である。語彙を単独で暗記し、限られた単文を作成することが第二言語の最善の学習方法ではない。文法をよく学び、名詞、動詞の活用、時制の試験でいい点を取ったとしても、ひとたび教室を離れた環境の中におかれると、その外国語を理解できないことはしばしばありうる。言語システムそのものを学ぶことは、特定の学生にとっては有益であるかもしれないが、それは実際の状況において言語を処理し、適切に対応できる能力を自動的に身につけられることを意味しない。

教室において意味のあるやり取りのアクティビティーがなく、言語システムの習得のみに重きがおかれた初期の言語学習は、学習者の苛立ちや不満足感をかりたてていた。多くの者は、2年以上も外国語を取り、文法の試験でもいい点を取ったにもかかわらず、その言葉が全く話せない不満を口にしている。こうした動向は、外国語教育そのものに対する批判にもつながっており、批判者はアメリカにおける外国語教育はひどいものであり、今日に至るまで、学習言語でビジネス取引ができるものはほとんどいないことを指摘している。

コミュニケーション能力を身につける過程におけるコミュニケーション・ストラテジーの重要性

幅広い範囲において学習言語を使用する機会を学習者に与えることが、外国語を学ぶ最善の方法であることはよく知られている。意味のある状況において学習言語を使用すれば使用するほど、学習者はより速くコミュニケーション能力を身につけることができる。自ら進んで言語を使用することは、学習プロセスの中核をなす。よって、学習者は自分自身で言語を発することに取り組まなくてはならない。学習者は、実際に言語を使用し、コミュニケーション・ニーズを満たすためにそれを調整していくことを通して学んでいく。学習者の言語習得のレベルに関わらず、彼等はまだマスターしていない言語を補うためのストラテジーを必要とする。コミュニケーションが途切れた際に、学習者は以下のことを成し遂げるためにそれらのストラテジーを用いる。

- \* コミュニケーションにおける話題に関連する情報及び理解できる情報を得る
- \* 試すことを通して学ぶ
- \* 誤りから学び、再び試す
- \* 練習をし、それによって様々なコミュニケーション・スキルを用いる
- \* 様々な相手とコミュニケーションを図る
- \* 効果的なコミュニケーションのために欠いている部分を補う方法を学ぶ
- \* 第二言語使用に際して、自信を持ってうまくこなす

「よい学習者」とは、バラエティーに富んだストラテジーを用いて、コミュニケーションにおける情報と経験を模索し、練習を通じた熟慮ある学習をし、意識的認識とコントロールを養う。これらのストラテジーには、相手に説明を求めたり、自分及び相手の発話をモニターしたり、様々な記憶法を用いたり、帰納的・演繹的推論をしたり、発音や構文を声を出して練習したり、言葉によらないコミュニケーション・ストラテジーを用いることが含まれる。

# 文化 ( Cultures )

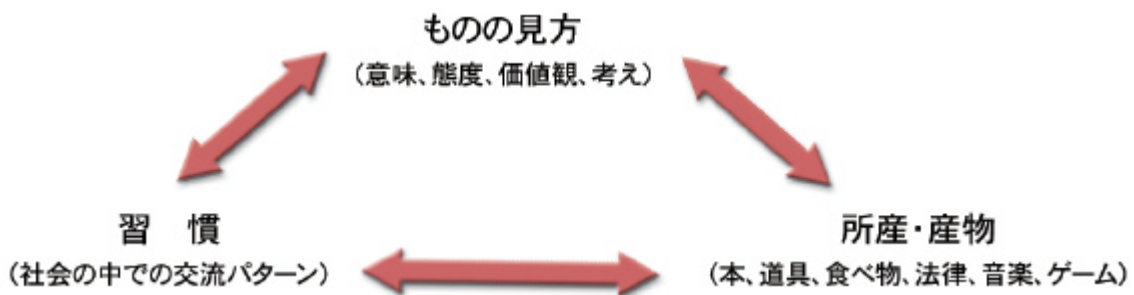
## 他の国の文化について知識と理解を深める

### 理論的根拠

他の文化をその言語を通さずに学ぶことは不十分であり、言語を学ぶことで、その文化をより深く、十分に理解することが可能となる。文化と言語の緊密な関係は、両者に関する知識を得た者しか理解することができない。アメリカ人の学習者は、他の者の世界観、生活方法、そして彼等の世界を構成する行動様式に関する認識を養うことが必要である。また、学習者は他の文化が世界にもたらす貢献と人類に共通な課題に対する解決策についても学ぶ必要がある。こうした認識を持たせることは、若い者がしばしば持つ自民族中心的な考え方を払拭するのに役立つ。オリバー・ウェンデル・ホームズ ( Oliver Wendell Holmes ) が言う、人間の思考は一旦新しい考えを取り入れると、元の状態には戻ることができないという主張 ( “ The Autocrat of the Breakfast Table ” ) は、自分の言語を通じて文化を学ぶことがもたらす利点を強調する。

### 論点

文化とは？「文化」という言葉は一般的に、社会の哲学的価値観やものの見方 ( perspectives )、習慣 ( behavioral practices )、そしてその所産・産物 ( products、実体があるもの、ないものを含む ) を含むものとして理解されている。下図は、文化的所産・産物と行動様式・習慣が、いかにある文化集団の世界観を構成する哲学的価値観やものの見方によって引き出されているかを示している。また、この図は三者がお互いに密接に関係していることも表している。



言語は文化的背景を表現し、また社会の慣習に参加するための主たる道具であるゆえ、言語を学ぶことは学習者に、他の方法では得ることのできない、ある文化に関する洞察力を養う機会を与える。よって、外国語の授業の本来の内容は文法や語彙ではなく、実際は言語を通して表現される文化なのである。学習者が他の文化を鋭く観察し、分析できるようになることが重要なのである。

ここ二、三十年、外国語教育に関わる者たちは文化を大きく2つに分ける傾向がある。それらは、

“Big C” culture (フォーマル) と “little c” culture (日常生活) である。多くの教師は、社会的・政治的・経済的な施設に関する知識や、歴史的な重要人物、そしてエリート文化として考慮されている文学や芸術といった “Big C” culture の概念で満足していた。“little c” culture には社会学者や文化人類学者によって研究される、衣食住や移動方法、そしてその文化のメンバーが必要かつ適切と考える行動様式等の日常生活に関わるものが含まれる。“Big C” culture と “little c” culture という分け方は、当初それまで外国語の教科書や教室で見過ごされていた社会学的要素に目を向けさせたという点で価値があった。しかし、両者は言語に密接に織り込まれており、またどのレベルの学習者にとっても両者を理解し、それらに関わることは非常に重要であるため、本書では両者は切っても切り離せないものとして扱う。

### 文化的誤解を避ける

同じ言語を共有する者は、多くの価値観やものの見方、習慣、そして文化的所産・産物を共有する。1つの言語を共有する話者達でも、世界のあらゆる場所に住んでいることが考えられ、結果的に異なる文化に属する。各々の文化は、時間、地理、そして独自の経験によって形作られ、同じ言語を共有していても、互いに異なる文化に生きていることになる。そうした様々な文化を分析し、教え、そして交流するために単一の基準をあてはめた場合、それは現実を無視し、それぞれの文化の威厳を尊重しないことを意味する。例えば、ラテンアメリカのスペイン語圏の文化とスペインの文化が同一であると仮定したり、メキシコとカリブからのアメリカへの移民の文化が一緒であると仮定することは、各文化のグループのアイデンティティーを否定することに等しい。また、アフリカのフランス語圏、北米、カリブ、南太平洋、そしてフランスの文化を同一と考えるのも同様のことを意味する。多くの者によって共有される言語の文化的多様性の例は数多くあり、意味深く、多様なアメリカ社会において強烈な影響を与えている。

ある文化に属する者が、他の文化について自分の価値観に基づいて仮定を立て、結論を引き出す傾向があることを学習者が理解することも重要である。しばしば自分の文化にしか通用しない評価基準を他の文化に表面的にあてはめて意見や態度を表明することがある。十分な情報、理解、感受性を持たずに他の文化を誤って判断することは、いずれ他の文化のメンバーに対して否定的な見方をすることにもつながりかねない。こうした傾向への対策として、教師は固定観念が形成されるプロセスや固定観念がどう偏見につながるかについて扱うアクティビティーを、学習者の年齢にあわせて取り入れることができる。最後に、学習者に他の文化のメンバーと様々な方法で交流する機会を与え、他の文化のものの見方、習慣、そして文化的所産・産物に対して正確な情報に基づいて結論を導き、そしてそれらに対する感受性を養うことは非常に重要である。

### 類似点・相違点を教える

どの文化を比較しても、類似点と相違点があることは周知の事実であるが、教師にとっての課題はどちらを学習者に最初に提示するかという点である。他の文化に属する者がアメリカにいる学習者と似た興味や振る舞いを共有するという点を強調することが、他の言語話者と話す際に好意的な考え方を確立するという証拠がある。しかし、外国語教育において相違点をないがしろにすることはあって

はならない。なぜなら、異なった仮定や価値観に基づいた、世界観と行動様式の相違点がお互いの間の誤解と対立を生むからである。外国語教育において、学習者が相違点に出くわすことを予期させ、目に見える相違点をいかに分析するかを助けをすることは重要である。すなわち、その言語が使用される文化の枠組で相違点を捉えられるようにすることである。外国語学習のすべてのレベルにおいて、学習者自身の文化と学習言語の文化の類似点と相違点の両者が提示されるべきである。他の文化の人や様々な文化を背景に表現されたもの（例：個人的な逸話、詩、見出し、社説、法律、音楽、博物館、電車、ペット）を学習者が経験することは彼等自身の認識を形作るのに役立つ。このように、文化と密接に関わる言語を個人的に探求することは、学習者が異文化理解と尊重を養うことを可能とする。

## 第二言語学習の特別な役割

文化を学ぶことの重要性は、外国語を使って他の文化の者と実際に情報や考えを交わすことにある。社会科学や芸術などの分野を通じて他の文化について学べる一方、他の文化のメンバーと話したり、書いたりすることを通して直接意味のある交流を図ることを学習者に可能とさせるのは第二言語学習のみである。歴史的であれ、現代のものであれ、ある文化のものの見方、習慣、そして産物を学習者はその文化のメンバーと特別な方法で共有することができる。つまり、それは「内にいる者（insider）」の見方を持ち合わせることであり、その方法こそが異文化間理解のための真の触媒なのである。

## コネクション (Connections : つながり)

### 他の教科内容に関連づけ、情報を得る

#### 理論的根拠

外国語学習は、公式にであれ非公式にであれ、他の教科とつながりを持たせることで、すべての学習者の学習経験に広がりを持たせることができる。知識は有力であり、外国語を通して様々な情報へとアクセスを拡大することは、彼等の「知識を得て、行動に移す (know and do)」能力を増すことになる。つまり、外国語を用いて情報を得ることで、話題や学問分野を問わず、学生に知識をもって能力をつけさせることができる。またそれは、形式上の教育の限界を超えた技能や興味を学習者に与えることにもなる。

今日の社会において、情報へのアクセスは、学校の内外に限らず、様々な形で行われている。学習者は、外国からのニュースを見たり、外国人のインタビューを通訳される前、もしくは通訳されている最中に聞くこともできる。また、家にいながらにして、世界中の情報をインターネットを通じて入手することも可能である。教室での指導は、学習者が外国語でのあらゆる情報を得るための手助けをする。学習者は、テクノロジー、個人的インタビュー、新聞、雑誌、辞書、または学校の図書館にある百科辞典などを通して情報を得ることができる。

外国語教育のカリキュラムにおいて、意識的に他の教科とつながりを持たせようとする努力は、学習者の情報と経験の新たな扉を開くことを意味する。またそれは、彼等の学校生活及び日常生活の経験を豊かなものとする。こうしたつながりを作り出す努力は、外国語の分野に広がりを持たせるだけでなく、逆に他の教科においても独自の経験と洞察力を付加することにもなる。

#### 論点

第二言語とその文化は、その知識を他の教科の分野と合わせることで、言語習得という枠からより幅の広い学習経験へと焦点を移す。言語をそのように使用することで、学習者は他の分野からの知識をより全体的でかつ広いシステムに応用することができる。例えば、ドイツのクラシック音楽の起源を学ぶ場合、ドイツ語を知っている学習者は、バッハがその時代の人と交わした手紙を読んだり、創作プロセスを記したバッハの日記の抜粋を読んだりすることで、作品への理解を深めることができる。学習者が教科の枠組を超えてつながりを持たせることを学ぶ過程において、1つの情報を他のクラスにも応用することができる。そうすることにより、学習者は外国語を通じて学ぶ個々の情報が、実は生涯教育につながるプロセスであることに気づくはずである。

教師主導の学習から学生主導の学習に変えていくことを更に推し進めれば、学習者は言語運用スキルを教室で求められることに対して受身的に使うことから、能動的に学校から離れて自己の興味のあることに応用することが望ましい。そうすることにより、学習者は言語学習という狭い枠から離れ、生涯応用がきく学習スキルや言語運用スキルを身につけ始めることができる。

外国語のクラスに来る学習者はそれまでに意識的に言語を学んだことがないかもしれないが、彼等は決して空の器ではない。彼等は彼等自身のそれまで築いてきた世界の経験や知識を持ちこんでくるのである（それは他の教科での学習経験と個人の経験の両方を含む）。更に、英語以外の言語を知っている学習者は、付加的に彼等の言語及び文化経験をクラスに持ちこむ。「他の教科内容に関連づけ、情報を得る」という言語指導目標を考えると、学習者が既に知っていることに新たに付け加える形で、教師は言語学習の経験を推し進めることができる。そうすることは、外国語習得は学習者のより幅の広い教育に照準をあわせることになり、学習者の言語以外での教科での学習に寄与し、彼等に情報を応用し、豊かにし、強化することを促し、そして学習者に「学び方を学ぶ（learn how to learn）」手助けをすることにもなる。



## 比較 ( Comparisons )

### 比較により、言語と文化への洞察力を養う

#### 理論的根拠

学習者は、言語学習を通して言語・文化間の異なるパターンを発見することにより、恩恵を受ける。新しい言語とそれがいかにして文化的に適切に使用されるかを学ぶことを通して、学習者は言語そのものの本質、言語的・文法的概念、社会の中における言語のコミュニケーションの機能、そして言語・文化間の交流の複雑さに対する洞察力を養う。

#### 論点

外国語を学んでではじめて、学習者は自分の母国語と文化に対してより深く考察できると一般に知られている。この見方は、第二言語学習の効果に対するいくつかの研究結果によって支持されている。研究結果はまだ決定的ではないが、母国語と外国語の比較を通して学習者が、自分の言語・文化、また広い意味での言語・文化という概念に対して理解をより深めるということを様々な逸話が証拠として提示されている。

言語と文化に関する同様の知識が、他の教科（例：言語学、人類学）によっても得られると主張する者がいるかもしれない。しかし、学習者が他の言語を学んで、実際にコミュニケーションを図るという実際的な経験は、彼等の言語・文化に対する理解をより現実的なものとする。外国語である意味をいかに表現して言葉にするかを熟考し、他の文化でいかに適切に振る舞えるかを考えることは、学習者の言語自体の本質に関する意識を高める。

例えば、学習者はしばしば外国語は自分の母国語に似ているものだという前提で外国語を学びはじめる。しかし、すぐに学習者は自分の母国語にないが、他の言語には存在する部分（例：文法における中性の存在）を発見する。また、それまでほとんど注意を向けていなかった点が、実は他の言語では重要であること（例：語末）を発見するかもしれない。さらに、ある文化では丁寧だと思われること（例：いつ誰にお礼を言うか）が、他の文化では異なることに気づくこともあるだろう。こうした経験は、文化・言語システムを比較することに学習者の注意を向ける。次に、そうした意識は学習している言語を使用する能力を促進するだけでなく、相手に意味を伝えるための母国語でのストラテジーについての洞察力を高めることにもつながる。学習者がその言語を学び続けるかに関わりなく、言語の本質とその文化への関わりに対する理解を深めることは、将来他の文化において交流する際に役立つであろう。学習者は、自分になじみのない状況において、言語がいかに使用できるかに関する仮定をたて、予測する方法を学ぶ。その結果として、学習者は他の言語・文化に対して、自分の知識だけに頼る単純な想定をすることをやめるであろう。

他の言語を長期に渡って学ぶことは、他の文化に属する者は自分とは異なった世界観を持っている

ことを学習者に気づかせる。他の文化での類似する概念を模索することで、彼等は様々な概念に対して新しい見方をするようになる。例えば、「パン」という言葉は、パンがアメリカ文化における役割に基づいて、学習者に特定のイメージを想定させる。しかし、そうしたイメージは他の文化にそのまま当てはめることはできない。他の文化ではパンの見かけ、味、使用方法、及びパンに対する認識が全く異なるかもしれない。学習者が、他の文化では「パン」という言葉に対して自分とは異なった連想をすることを理解するとき、彼等はまず自分の言語・文化における「パン」という概念を模索しなければならない。それにより、学習者は外国語を学ぶことは、単に新しい語彙を学ぶことではなく、語彙に付随する全く新しい概念を習得することであることに気づきはじめる。

第二言語学習と文化間の模索は、学習者の世界観を様々な形で広げる。第二言語を学習することは、他の文化の新たなものの見方を学習者に意識させ、また同時に学習者自身の言語・文化に対する洞察力を養う。また、言語・文化の両システムを自分のそれと比較することにより、学習者は有益で重要な方法で批評的考察力 (critical thinking abilities) を発展させることができる。

## コミュニティー（Communities：地域社会）

### 国内及び国外において多文化・多言語社会に参加する

#### 理論的根拠

工場主体の経済から、より情報、テクノロジー、そしてサービス産業に依存する経済への移行は変化しているアメリカを象徴している。ビジネスが国内、及び海外へと市場を拡大するに従い、アメリカの国民は英語のみならず他の言語にも長けている必要がある。外国語を使用するスキルは、アメリカ人が他の国や文化から発信された情報を直接入手し、政治、ビジネス上の、また個人間における交渉を相手と面と向かってすることを可能とする。こうした能力は、長期に渡って外国語を学びそして使用することによって発展及び保持することができる。さらに、学習者は学んだスキルを即実践に用いる時に、その外国語に抜きん出ようと動機づけられる。彼等は、他の言語でコミュニケーションを図る能力が、学校のみならずコミュニティーにおける奉仕活動に役立ち、国内及び国外における就職の可能性を広げ、個人の利益のために自分の興味を探求することを可能とすることを発見する。また最終的に、他の言語でコミュニケーションを図ることで、世界中の人々が相互依存の関係にあることに気づくであろう。

この目標は他の4つの目標からの要素を合わせもつ。細心の注意を払って言語と文化の構成要素を適用することは非常に重要である。この目標におけるスタンダードは、注意深い言語使用のみならず、個々の文化のものの見方、所産・産物、そして習慣に関する知識を応用する能力、他の教科とつながりを持たせる能力、そして自分の言語・文化に対する洞察力を養うことと深く関係している。

#### 論点

より生産的で競争力のある労働力の必要性から、多くの学校では、「学校から職場へ」そして「学校から大学へ」と学生がスムーズに移行できるようなカリキュラムに力を入れている。こうした教育面での努力は外国語のクラスにも及び、世界中の多言語社会において働く能力を持ち、自信のある学生の育成に努めている。今日の社会と労働力のニーズは、職業訓練学校、学問的施設、ビジネス、市町村・州・国レベルの政府機関、そして公的・私的組織において蓄積された資源と専門的知識を織りあわせることで、十分満たすことができる。変化しつつあるアメリカ社会とグローバルなコミュニケーションが即実現する世界において、英語を話さない顧客のニーズを満たせる能力のある労働力が求められる。他の言語と文化に関する知識を身につけた者は、グローバルな社会のニーズをより満たすことができる位置にあると言える。

家庭環境によっては、直接多言語社会に触れられる学習者もいる。またすべての学習者は、アメリカには英語以外の言語が話されているコミュニティーがいくつも存在していることを認識することで利益を享受できる。例えば、ルイジアナ州にはフランス語が話されているケージャン地域（Cajun areas）、テキサス・ヒル・カウンティー（Texas Hill County）にあるドイツ語を話す地域、東北地

方のイタリア語社会、南東・南西地域のスペイン語が話されている社会、そしてウェスト・コースト（West Coast）のアジア街などがあげられる。外国語を学ぶ学生は、文化に対するより鋭い認識を養い、アメリカ国内外に存在する多言語社会でうまくやっていくための備えができているといえる。

1つ以上の言語の運用能力を身につけることは、就職という目的以外に、他の様々な活動へ参加するための門戸を開いてくれる。テレビの画面やコンピュータのスクリーンを通して、アメリカ人は全世界に直接手を伸ばすことができる。また、すばらしい文学や芸術作品を通して、自己への理解を深めることも可能である。アメリカ人は他の国へ旅をし、その国の人々と交流することで、1つ以上の言語と文化に関する知識を身につけることが、他の文化における芸術的そして文化的創造物をより十分に経験することを可能にすることに気づくであろう。

## よく質問される事項 (Q & A)

### > スタンダードが 4、8、12 年生を対象にしている理由は何ですか？

多くの州において外国語学習は主に高校の 9 - 10 学年<sup>訳注3</sup>に行われるのですが、スタンダードの実行委員会がどうして K - 12 (幼稚園 - 高校) を対象にスタンダードを草稿し、その学習到達指標 (progress indicators) を 4、8、12 年生にむけて設定したのか、と多くの先生方から質問を受けます。その理由は、スタンダード実行委員会は科学や歴史、美術等、すべての学科関係のスタンダード・プロジェクトに合わせて外国語スタンダードを開発したからです。実行委員会の任務は外国語学習で学習者が何を知り、どんなことができるようになるのかという、知識及び言語運用能力に関する内容基準を設定すること、そして、他のすべての学科分野と並立させながら、4、8、12 年生の学習進度到達指標を設定することにあります。もし、スタンダードを現在最も普通に行われている高校だけに限るとしたら、外国語分野が目指している必修科目としての強力な立場を獲得することは難しいでしょう。

\* \* \*

### > スタンダードと州及び地方との関係はどのようなものですか？

スタンダードは、各州及び地方が学校におけるカリキュラムを推進していく際に、その最善の指針として役立つことを意図して作られています。スタンダードは各学校で自発的に施行されるもので、州や地方の役割や権限を奪うものではありません。このスタンダードはカリキュラムでもなく、また州の枠組みに取って代わるものでもありません。そのため、各地方や学校で出されるカリキュラム関係の資料に見られるような詳細な内容は本スタンダードには盛り込まれていません。本スタンダード・ガイドラインは、外国語教育分野における定義づけと専門的研究成果の反映にその価値があると言えましょう。また言語研究の発展成果から生まれてくる様々な可能性についてもスタンダードの中で解説しています。本スタンダードを設定するにあたり包括的な内容を盛り込むべく、その深さと広さには固執しましたが、数<sup>訳注4</sup>に関しては極力押さえるよう心がけました。

\* \* \*

### > スタンダードと言語能力ガイドラインとの関連はどうなっているのですか。

既にご存じの先生方もおられると思いますが、スタンダードの中には、目標文化の指導内容を拡大して生活スタイルや文明史なども取り入れています。またすでに展開されていたコミュニケーションの実践力に重点をおくコミュニケーション・オリエンティド・インストラクション (communication-oriented instruction) などの学習指導の成果も取り入れられています。しかしながら、包括的内容設定の方針としてこのスタンダードでは (言語運用能力ガイドラインのように) リ

<sup>訳注3</sup> アメリカでは州や学校により、高校は 9 年生 - 12 年生の 4 学年制だったり、10 年生 - 12 年生の 3 学年制だったりします。中学校も 2 学年制や 3 学年制のところがあります。

<sup>訳注4</sup> 11 項目あるスタンダードのことを指す

スニング、スピーキング、リーディング、ライティングの言語スキルを切り離して扱うことはしませんでした。技能別には扱わずにコミュニケーションを目的別にとらえ、相手とのやり取り（interpersonal）、言語を解釈すること（interpretive）、考えや意見を発表すること（presentational）の3つに分けて取り扱いました。これら3つの形態の区別に関わらず、コミュニケーションは文化に基盤を置かねばなりません。スタンダードの企画や構成が学習者の初歩から長期に渡る学習成果を可能にする新しい外国語教育分野への進展を目指していることに気づかれることでしょう。

\*\*\*

### > スタンダードは強制されるものですか？

スタンダードは自発的に施行されるものです。州や地方の政策立案やカリキュラム開発に携わる人たちが学校における外国語の役割などを新たに考慮する際に、スタンダードはそのモデルとして役立つことを意図して作られています。財政や政治的情勢がいかに変わろうと、個々の先生方が学習者の進歩を支援するため学習指導を変更して、外国語教育の5つの目標領域、すなわち、コミュニケーション、文化、コネクション、比較、及びコミュニティー、を目指して努力していくうちに、スタンダードの効力は全国の教室の中で疑いなく発揮され、感じとられるようになることでしょう。

\*\*\*

### > このスタンダード・ガイドラインで、外国語学習はすべての学習者に適用されるべきだと規定している理由は何ですか？

21世紀のアメリカにおいて、職場でのやりとりを英語でのみ行うという場合は次第に稀になっていくでしょう。学習者が国際関係の職業に携わるにしても、あるいは多言語社会で会社に勤めるにしても、英語以外の言語に関する知識は雇用者にとってますます大切な才能と理解されるようになっていくでしょう。これは、すべての学習者が他の外国語を習得する機会を持つべきだという大きな理由の1つになっています。しかしながら、従来の外国語プログラムが伝統的にすべての学生を受け入れてこなかったために、本スタンダードの提案は外国語教師に大きなチャレンジになるのではないのでしょうか。

その理由として、本スタンダードの重要な部分として言語学習内容を幅広く構成すること、すなわち、他の学問分野と関連づけること、かつ自己の言語と文化に対する深い理解を養うこと、さらに、これまで伝統的に学習者の言語経験の中に統合されていなかった要素であるコミュニケーション・ストラテジーや学習ストラテジーなどを含んでいることがあげられます。言語教育プログラムの中にこれらの要素を含めることにより、学習者に言語習得に責任を持つ者として自分自身の重要性を認識させることとなります。また、そのことにより、学習動機を高めることができます。5つの目標領域とその実現を支えるためのスタンダード項目を含む言語プログラムに参加することによって、学習者はこれまで一般的に明らかでなかった言語学習の有益性を見出すでしょう。21世紀において、アメリカ合衆国の市民は地域社会ではもちろんのこと、すべての職場で様々な言語が実際に応用されている場面を多く目にするでしょう。つまり、このスタンダードを実施することは、次世代の世界に向けてその基盤作りを支援することとなるのです。

\* \* \*

### > しかし、実際に外国語を学ぶことのできない学習者の場合はどうなるのでしょうか？

歴史的にみて外国語教育は、学習に有能な者だけが成功するという誤った想定の下に大学に進学する学生や優秀な学習者だけに限られていました。しかし、様々な教育状況の下で、適切な指導援助をともなう高度の期待感により、ふつうの生徒が素晴らしい学習成果を収めている事例が発表されています。すべての学習者に外国語を学ばせることと全く同じ方法が、その事例における学習者にも適用されているのです。例えば、ニューヨーク州のある高校では、フレドリック・コーヘン校長は先生方にリージェント候補でない生徒の名前を知らせずにいました。すると学期末にリージェント証書を取得した全体の生徒数は15%増加したとのことです(シャンカー(Shanker)1995)。さらに、先生が「準備不足」だった時の方が、全員の生徒を教えるのがうまくいったとのことです。また、他の学校区では特別教育のクラスに配置された中学生が3年間の外国語プログラムに入りました。念入りに企画された目標と指導の結果、これらの学習者全員がコースの学習目標を完了し、数人は言語学習をさらに継続、その後リージェントの試験にパスして、海外学生交換プログラムに参加したとの報告もあります。(外国語プロジェクト 1985)

\* \* \*

### > スタンダードに取り組む教師への支援はありますか？

教育に携わる現場の教師にとって研鑽と向上を心がけることは大切なことです。スタンダードに対する認識を高めるために既に全国各地で各種のワークショップやセミナーが催されています。他の専門職の各種団体が職場での継続教育の機会をふやす努力をしているように、我々外国語教育の組織団体でも教師に対して教科と教育実践に関する技術を啓蒙、それを発展させていく機会を設ける必要性を認識しております。現在、これらの団体では、テクノロジー、遠隔教育、連続ワークショップ、あるいはネットワークなどを通して、最新の教育向上の機会に参加できるよう、現場の教師を支援する様々な方策を模索しています。外国語教師を支援している国家、州、地方の専門職団体、高等教育機関、その他多くの地方においては、スタンダードをカリキュラムに取り入れ、学習者の成果を上げるため教室内での実践に関する長期的研修の機会についても計画を進めております。

\* \* \*

### > 5つの目標領域はすべて同じですか？

いいえ、違います。5つの目標領域であるコミュニケーション、文化、コネクション、比較、コミュニティは、個々としてすべて同じものではありません。これらはむしろ連係する全体の各部分として考えられます。これらの構成する外国語教育の目標領域とそれを支える柱のスタンダード項目は、第二言語学習の総体的目標領域として、その学問分野の一致した意見を代表していると言えます。

\* \* \*

**> それでもなお、私がもし（5つの目標領域で）コミュニケーションの目標が最も重要だと考えると主張したら、どうでしょうか？**

コミュニケーションの目標は確かに重要です。しかし、21世紀の学習者が、文化の面で適切に対応したり、外国語のみでしか得られない情報を入手したり、また、自己の言語や文化について理解を深めるためには、他の言語や文化を理解できることが必要になります。また、学校以外の場でも学んだ事柄を応用できる準備が必要になります。1つの目標だけに焦点を絞ると将来に対する十分な準備をすることができなくなります。

\* \* \*

**> 文法の役割は何ですか？**

過去において、外国語指導は主として語彙や文法の規則の記憶に重点が置かれていました。スタンダードズは、言語構造や文化についてはもちろん、コミュニケーション・ストラテジー、学習ストラテジー、あるいは、批評的考察力（critical thinking abilities）を学習者が十分に研究、開発、活用する機会を与えるというような、外国語のクラスの内容定義を越えた要素についても幅広く取り入れています。不幸にも、長い年月に渡って証明されたように、文法は、それ自体では学習言語を話したり、理解したりできる人々を生み出すことはできません。学習者が秩序正しく並べられた言語の要素、例えば、文法事項や語彙を学ぶことだけでは外国語を習得することは無理です。学習者は、書かれたものを読んだり解釈したりすることはもちろん、相手の言っていることを理解し、話し合うというように学習言語で実際のコミュニケーションが実践できるようになることが重要です。文法は言語の勉強にとって重要です。それで第4の目標である「比較」の領域では、学習者が自己の言語と学習言語を色々な面で比較対照することにより、言語の組織体系の本質について学ぶよう注意を集中してもらいます。

\* \* \*

**> 学校区における外国語プログラムが7年生からしか施行されない場合、私はどのようにスタンダードズを使用したらよいのでしょうか？**

スタンダードズには学習の理想的な順序と各種の基準が記述されていますが、ある地方のプログラムは学習者に対して、現在のところはこれらをすべて提供することができないことがあります。先生方やカリキュラム立案者は、学校区に対し小学校の低学年まで言語学習の過程延長を奨励する努力を払いながら、その地区で現在施行中のプログラムに照らし合わせてスタンダードズを検討することができます。2年間と12年間では学習プログラムの結果に非常な差異が出てくることは明白です。そこで、スタンダードズを部分的に選択して取り入れたり、年齢にふさわしい内容に調整し、4年生の進度到達指標サンプルなどを使って、より短期間の学習過程を作成したりすることもできます。州と地方レベルでは、カリキュラム立案者は目下施行中のプログラムを企画する手段として、もしくは、言語学習の過程延長を可能とする資源と時間が与えられた場合に、本スタンダードズは学習者の成果に強力な基盤を与えるドキュメントとして活用することができます。

\* \* \*



## > 幼年時に言語学習を行う理由は何ですか？

他の言語で、話す、読む、書く、考える、ことなどを学ぶのに長い時間を要するということは残念ながら事実です。そして、他の言語に熟達する才能の育成には年齢と学習態度が影響を及ぼします。ちょうど数学の理論的判断の技能を子供の年令と発達レベルに相応させて学習させ、それを色々な領域や活動内容に適応させていくのと同様に、他の言語と文化の要素も、習得し応用されるべきです。伝統的に、教育の中心から除外された学科は学生や親達から重要視されません。学習者は自分達が見失っているものがあるのも知らず、学習することをすべて避け、さらに悪いことには、最低限のわずか2年間の言語学習でかなり進んだ成果をもたらすものだと考えています。本外国語スタンダードは、学習者、両親、政策担当者に、学生が知るべきことや長期間の言語学習の結果できるようになる言語運用能力を具体的に示しています。学習者や親は、長期に渡る学習結果の成果が学年を追って示される学習到達指標を参照することによって、他の言語を習得することに対する可能性とそれに要する年月その他の努力など、現実の姿を把握することができるでしょう。

\* \* \*

## > スタンダードに基づくプログラムでのアーティキュレーション（articulation：学校レベル間の引き継ぎ・つなぎ）はどうあるべきですか？

アーティキュレーションに関する重要な課題は学生のプレースメント（placement）の問題です。すなわち、学習者の知識や言語運用力・実践力を判断する新しい評価法を作り出す前に、スタンダードを基礎にしたプログラムを完了した学習者のプレースメントをどのように行うかという問題です。現在、州や学校区などでは、スタンダードに到達する過程で学習者がどれほどうまくやれる必要があるかという問題を取り扱う実践力（パフォーマンス）スタンダードの設定が要望されています。その要望が実現されるために必要なことは、教師が協力して学校や学年レベル間の学習指導におけるプログラム目標に関する討論を進めていくことです。このような話し合いは、とぎれの無い（seamless）スムーズな継続が可能となる学習指導と学習者のとぎれの無い継続的学習のあり方を確立するために必要なことです。